

JAERI—M
4 7 6 2

GPL—GENKEN Programming Language

1972年3月

浅井 清 · 富山 峯秀

日本原子力研究所
Japan Atomic Energy Research Institute

GPL-GENKEN Programming Language

日本原子力研究所東海研究所原子炉工学部計算センター

浅井 清 ・ 富山 峯 秀

(1972年2月10日受理)

ソフトウェア記述言語GPLの機能について報告する。GPLは順位関数をもつ順位文法から導出される言語である。GPLコンパイラの第1版はおよそ8000枚のFORTRAN IV語で書かれており、このコンパイラはFACOM230-60計算機の相対形式オブジェクト・プログラムを作り出す。コンパイラはGPL語のソース・カードを1分間に1000~2000枚処理する。このコンパイラは他機種にも適用できるように設計されている。

GPL-Genken Programming Language

Kiyoshi ASAI and Mineyoshi TOMIYAMA

Div. of Reactor Engineering, Tokai, JAERI

(Received 10 February 1972)

The features of a system writing language named GPL (Genken Programming Language) are described. The GPL is derived from a precedence grammar with precedence functions. The first version of the compiler is written in FORTRAN IV language and consists of about 8000 statements. It produces object programs in relocatable binary form on the FACOM230-60 computer. It also compiles about 1000 to 2000 GPL source cards per minute, designed for easy modification on other computer systems.

目 次

1.	はじめに	1
2.	GPLの概要	1
3.	GPLで使用できる文字	6
4.	予約語	6
5.	定数	8
6.	名まえ, 変数, 文, レジスタ	11
7.	演算	12
8.	式	13
9.	代入文	13
10.	空文 (null 文)	15
11.	手続き参照文 (procedure 文)	15
12.	場合文 (case文)	18
13.	goto 文	20
14.	if 文	20
15.	while 文	21
16.	for文	21
17.	セル宣言	22
18.	同義語宣言	24
19.	手続き宣言	25
20.	関数宣言	27
21.	領域宣言	29
22.	ブロック	30
23.	ブロック・レベルとネスト	31
24.	謝辞	32
25.	付録	34

(GPL の文法と言語, 解析方法)

1. は じ め に

いままで日本原子力研究所ではアセンブラ語, FORTRAN 語などを使ってソフトウェアの開発がおこなわれてきたが, ユーザの立場からすると, これらの言語はソフトウェア記述言語としては不適當である。FORTRAN 語では計算機システムのもつハードウェア, ソフトウェアの機能を十分に生かすことができず, アセンブラ語ではコーディングと虫取り作業に時間をとられるために, プログラムが完成して使用可能となつたときに新しい計算機が導入されることになる。そのうえアセンブラ語では計算機間の互換性もない。最近開発されているソフトウェアは, その規模が非常に大きくなつていたので, そのソフトウェアのどの程度の部分が機種の変更に耐えて生き残れるかが大きな問題となつてきたが, これはよいソフトウェア記述言語の開発によつて解決することができる。そのようなソフトウェア記述言語の1つとしてN. Wirth によつて提案されたSystem 360 のための言語PL 360 1) は, その構成が単純簡潔でコンパイラの作成と維持が容易であるという点でわれわれの要求に合っている。ただしPL 360 はSystem 360 のために作られたものであるから他の計算機でこの言語を使用するためには, その大部分の仕様を変更しなければならない。またユーザが開発するソフトウェア記述言語は, メーカーから供給されるオペレーティング・システムのもとで動くことが望ましいから, 問題向き言語(例えばFORTRAN 語)との実行時における結合可能性なども問題となつてくる。GPLはPL 360 の考えを基本としこれらの点を考慮して作られたソフトウェア記述言語である。GPLはFORTRAN, ALGOL, アセンブラ語の機能を取り入れており, また機能の変更にもある程度は耐え得るように設計されているので, これらのどれか1つの言語の立場からみると, GPLのもつ機能は不徹底の感はまぬがれない。しかしGPLは, これらのどの言語よりも使いやすく, そのうえハードウェアを意識してコーディングするとアセンブラ語に近いオブジェクトを作ることができる。

2. G P L の 概 要

2.1 GPLの文法と言語

GPLは順位関数をもつ順位文法^{2), 3)}, によつて定義されており, 言語の解析は順位関数をつかつておこなう。順位関数が存在すれば, $N \times N$ の順位関係の行列(N は文法要素の数)は $2N$ 個の関数値に縮約され, プログラムの速い解析を実現することができる。一般には順位関数は存在しないが, 任意の順位文法についてこれと同値な順位文法で順位関数をもつものが存在する。GPLはこの事実を利用している。GPLの文法と順位関数, およびその解析法については巻末の付録に掲げる。ここでプログラムの例をあげておこう。

1. は じ め に

いままで日本原子力研究所ではアセンブラ語, FORTRAN 語などを使ってソフトウェアの開発がおこなわれてきたが, ユーザの立場からすると, これらの言語はソフトウェア記述言語としては不適當である。FORTRAN 語では計算機システムのもつハードウェア, ソフトウェアの機能を十分に生かすことができず, アセンブラ語ではコーディングと虫取り作業に時間をとられるために, プログラムが完成して使用可能となつたときに新しい計算機が導入されることになる。そのうえアセンブラ語では計算機間の互換性もない。最近開発されているソフトウェアは, その規模が非常に大きくなつていたので, そのソフトウェアのどの程度の部分が機種の変更に合わせて生き残れるかが大きな問題となつてきたが, これはよいソフトウェア記述言語の開発によつて解決することができる。そのようなソフトウェア記述言語の1つとしてN. Wirth によつて提案されたSystem 360 のための言語PL 360 1) は, その構成が単純簡潔でコンパイラの作成と維持が容易であるという点でわれわれの要求に合つている。ただしPL 360 はSystem 360 のために作られたものであるから他の計算機でこの言語を使用するためには, その大部分の仕様を変更しなければならない。またユーザが開発するソフトウェア記述言語は, メーカーから供給されるオペレーティング・システムのもとで動くことが望ましいから, 問題向き言語(例えばFORTRAN 語)との実行時における結合可能性なども問題となつてくる。GPLはPL 360 の考えを基本としこれらの点を考慮して作られたソフトウェア記述言語である。GPLはFORTRAN, ALGOL, アセンブラ語の機能を取り入れており, また機能の変更にもある程度は耐え得るように設計されているので, これらのどれか1つの言語の立場からみると, GPLのもつ機能は不徹底の感はまぬがれない。しかしGPLは, これらのどの言語よりも使いやすく, そのうえハードウェアを意識してコーディングするとアセンブラ語に近いオブジェクトを作ることができる。

2. G P L の 概 要

2.1 GPLの文法と言語

GPLは順位関数をもつ順位文法^{2), 3)}, によつて定義されており, 言語の解析は順位関数をつかつておこなう。順位関数が存在すれば, $N \times N$ の順位関係の行列(N は文法要素の数)は $2N$ 個の関数値に縮約され, プログラムの速い解析を実現することができる。一般には順位関数は存在しないが, 任意の順位文法についてこれと同値な順位文法で順位関数をもつものが存在する。GPLはこの事実を利用している。GPLの文法と順位関数, およびその解析法については巻末の付録に掲げる。ここでプログラムの例をあげておこう。

```

OPT 0 1 0 1 0 0
*BEGIN
PROCEDURE TSORT3(M*N) *
COMMENT ALGORITHM 245. TREESORT3 BY ROBERT W. FLOYD.
THE COMM. OF THE ACM., DEC., 1964. *
BEGIN ARRAY 100 REAL M* INTEGER N*
PROCEDURE EXCHANGE(X*Y)*
BEGIN REAL X*Y*T*
T=X* X=Y* Y=T*
END *
PROCEDURE SIFTUP(I,N)*
BEGIN INTEGER I*N,J*K* REAL COPY*
K=I* X1=K* COPY=M(X1)*
LOOP.. J=2*K* X1=K* X2=J*
IF J.LE.N THEN
BEGIN IF J.LT.N THEN
BEGIN IF M(X2*1).GT.M(X2) THEN X2=X2*1* END*
IF M(X2).GT.COPY THEN
BEGIN M(X1)=M(X2)* K=X2* GOTO LOOP* END*
END*
M(X1)=COPY*
END *
INTEGER I*
I=N/2 *
L0.. SIFTUP(I,N)* I=I-1* IF I.GE.2 THEN GOTO L0 *
I=N *
L1.. BEGIN SIFTUP(1,I)* X3=I* EXCHANGE(M(1),M(X3)) *
END*
I=I-1* IF I.GE.2 THEN GOTO L1 *
END *

```

fig. 1 GPLプログラムの例

FACOM 230-60 FORTRAN D -710110- 0009-03

COMPILATION 72.01.17 PAGE 1

* SOURCE STATEMENT *

```

C
C TEST PROGRAM FOR TREESORT3
C
1 DIMENSION M(10)
2 REAL M
3 READ(5,10) N,(M(I),I=1,N)
4 10 FORMAT(12,7F10.4)
5 WRITE(6,20) N,(M(I),I=1,N)
6 20 FORMAT(1H1//10X,'THE INPUT DATA ... ' 2X,15, 'ELEMENTS AS FOLLOW'
7 1 // (2X'10F12.5))
8 CALL TSORT3(M,N)
9 WRITE(6,30) N,(M(I),I=1,N)
10 30 FORMAT(1H0,10X,'THE RESULTING ARRAY',//(2X,15,10F11.4))
11 STOP
12 END

```

fig. 3 TSORT3を呼び出すFORTRANプログラム

	THE INPUT DATA ...			ELEMENTS AS FOLLOW			
	5.00000	3.00000	6.00000	1.00000	5.00000	4.00000	2.00000
7	THE RESULTING ARRAY						
	1.0000	2.0000	3.0000	4.0000	5.0000	5.0000	6.0000

fig. 4 入力データと結果

FDICT 100000000220 031000000001 100100100100 100100100100 100100100100 000000000222 021400000001 343342326331
 343363100100 100100100100 000000000220 000000000000

INGEN HAS PASSED

000001	000001000000	000000000000	000000000001	000000000004	000000777777	000000000001	024040404040
000007	000000000002	000001000006	000000000015	010510000000	FST	FL	400203404140
000015	023410000000	010510000013	023410000000	LX	AXI	JUMP	404140414040
000023	010317000000	044100000026	044100000023	AXI	LA	STAD	404140414041
000031	044110000025	040010000023	045710000012	JUMP	LA	STA	414141414041
000037	012210000017	010512000000	023410000020	FL	LR	MA	414041414141
000045	004300000043	043110000016	012210000017	LA	LA	TH	404141414141
000053	400010000105	010310000016	070110000000	JUMP	FL	FS	414140414040
000061	400110000075	010310000016	070110000000	AXI	FS	JNAO	414140404141
000067	410010000105	010513000000	046300000001	FL	FS	FL	414040414141
000075	023412000000	012710000015	023412000000	LA	JUMP	STAD	404140404041
000103	406700000001	010317000000	044110000066	LA	JUMP	STX	404041414141
000111	400010000112	010310000000	004200000043	LA	STA	LAI	414040414140
000117	025710000121	500000000021	500000000000	NOP	S	STA	414140414141
000125	010310000021	170110000005	400010000142	LA	LA	STA	414141414041
000133	402300000002	025710000121	500000000004	AXI	LX	STX	404141414141
000141	404700000000	014710000006	045710000160	AX	SXJ	NOP	404141404140
000147	500004000000	010310000021	011010000004	LA	LA	TL	404141414141
000155	400010000170	400010000144	012710000010	JUMP	JUMP	LA	414141404040
000163	010610000003	011010000004	044110000160	S	STAD	STAD	414141414141
000171	044110000101	041100000075	044110000071	STAD	LA	STAD	414141414041
000177	010317000000	044110000070	046700000001	STAD	AXI	STAD	404140404141
000205	044110000123	400010000123	045710000010	JUMP	JUMP	STAD	414141410011
000213	400000001704	304000010275	700000000000	400010000173	200000777766	000014000006	101000000020

fig. 2 翻訳されたプログラムTSORT3 (FACOM230-60)

2.2 異種言語プログラムとの結合

GPLで書かれたプログラムをFORTRANやアセンブラのCALL文を使つて呼び出すことができる。またGPLの手続き参照文によつてFORTRANやアセンブラ語で書かれたプログラムを呼び出すこともできる。いずれの場合にも命令の中断(interruptions,またはtraps)に対する措置はプログラマの責任においておこなわなければならない。ひとつのジョブの主プログラムがFORTRAN語で書かれているときには、中断に対する措置はFORTRANシステムの仕様にしたが、主プログラムがGPLで書かれているときには、中断に対する措置はプログラムがおこなわなければならない。

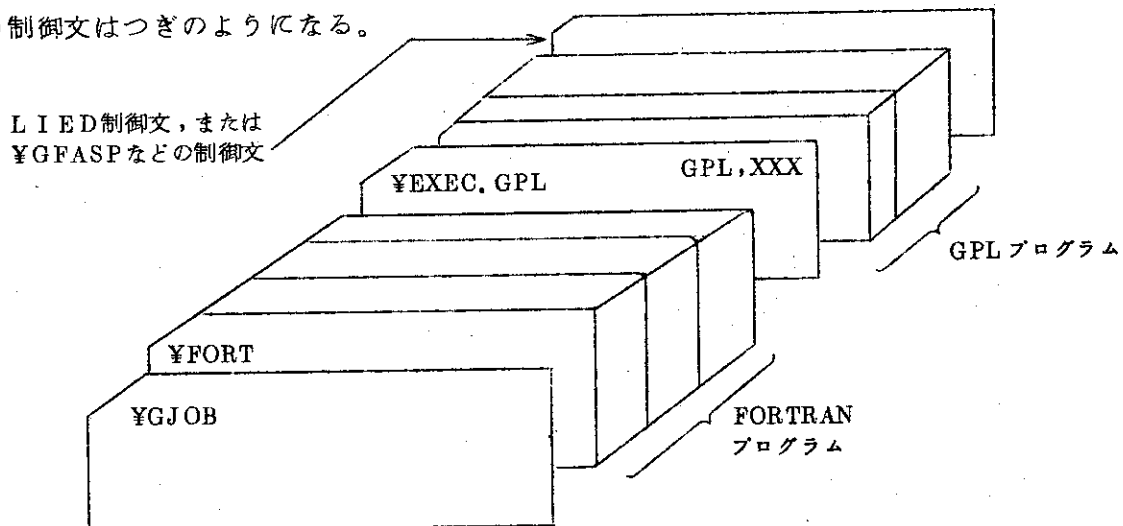
2.3 GPLコンパイラ

GPLコンパイラ(第1版)は命令部分の大きさが約25K語のFORTRANプログラムである。作業領域を含めて約65K語のGPLコンパイラは、約500枚のソース・カード(これをFORTRAN語で書くと約1000~1500枚のソース・カードとなる)を主記憶内(in core)で翻訳することができる。

作業領域をふやして98K語とすれば、約2000~25000枚のソース・カードを翻訳することができる。これらはデータを主記憶に常駐させるone pass方式でおこなわれる。このコンパイラは現在はFACOM230-60の相対形式プログラムを作り出すが、これ以外の機種についても大きな変更なく適用できるように工夫されている。

2.4 GPLの使用法

GPLコンパイラの出力は、FORTRANコンパイラの出力と同じくRELBINなるFD名をもつファイルに相対形式で書かれる。したがつて現在原研の計算センタに使用されているマクロ化された制御文はGPLの出力に対しても有効である。GPLコンパイラはディスクに実行形式で保存されているので、FORTRAN語とGPLで書かれたプログラムが混在するジョブの制御文はつぎのようになる。



ここでXXXはGPLnnとし、ひとつのジョブのなかで1回以上GPLコンパイラを呼び出すときは、nnは00から順番に番号をつけてゆく。この例ではFORTRANプログラムが先になつているが、これはGPLプログラムが先に翻訳されてもよい。

2.5 翻訳(コンパイル)単位

GPLのコンパイラの一貫した処理の対象となるGPLのプログラムを翻訳単位とよぶ。GPLプログラムは、文.(・はピリオド)の形式であるが、このプログラムがコンパイラの正常な処理の対象となるためには、この文はbegin ではじまり、end で終わらなければならない。また翻訳単位の前後はGPLの制御カード(第1行に*)が続くから、GPLの翻訳単位はつぎの形式となる。

```

    * GPL          OPTIONS
    . begin      ----- end.
    *
  
```

翻訳単位

ここでOPTIONSは指定しなくてもよいが、FASPと書くと翻訳されたアセンブラ語が出力される。NOLISTと書くとソース・リストは出力されない。

ERRn (n=1, 2)と書くと入力されたソース・プログラムについてそれぞれレベル1と2のエラー・チェックをおこなう。

BLK・0と指定するとブロック内で宣言された変数に対する番地の割付けがALGOL流となる。

この翻訳単位(プログラム)が

```

    . begin      proceclure      name      . . .
  
```

と手続き宣言ではじまるときは、この手続き名nameはサブルーチンとして登録され、外部(この翻訳単位以外のプログラム)からの参照が可能となる。手続き宣言ではじまらないときは、この翻訳単位はメイン・プログラムとして登録される。そのエントリ名はGPMAINである。

2.6 翻訳の速さ

GPLコンパイラはFACOM230-60のFORTRAN語で書かれているが、このGPLコンパイラが入力を処理する速さは、1分間に1000~2000枚である。付録にあげた例(Treesort 3)の処理には、コンパイラの初期設定の時間約0.3秒を除いて約1.5秒かかる。このうち約0.3秒は入力されたソース・プログラムを印刷するために使われる。(1行の印刷に約10 msec.が必要である。)1.5秒から逆算するとTreesort 3は1200枚/分で処理されることになる。

3. GPLで使用できる文字

GPLではコード系は26系を使用し次の文字が使用できる。

1. 英大文字

A, B, C, ..., X, Y, Z

2. 数字

0, 1, ..., 8, 9

3. 特殊文字

□ (空白を示す)

=

+

-

*

/

(

)

,

.

¥

▼

4. 区切り記号 (予約語)

GPLの文法で意味が固定されていて、他の意味に使用することを許さない語や記号を区切り記号 (delimiters, または reserved words) という。区切り記号には次のものがある。

ARRAY

ABS

ADCON

BEGIN

BASE

BIT

BYTE

CASE

CHARACTER

COMMENT

3. GPLで使用できる文字

GPLではコード系は26系を使用し次の文字が使用できる。

1. 英大文字

A, B, C, ..., X, Y, Z

2. 数字

0, 1, ..., 8, 9

3. 特殊文字

□ (空白を示す)

=

+

-

*

/

(

)

,

.

¥

▼

4. 区切り記号 (予約語)

GPLの文法で意味が固定されていて、他の意味に使用することを許さない語や記号を区切り記号 (delimiters, または reserved words) という。区切り記号には次のものがある。

ARRAY

ABS

ADCON

BEGIN

BASE

BIT

BYTE

CASE

CHARACTER

COMMENT

DO
 ELSE
 END
 EXIT
 FOR
 FUNCTION
 GOTO, または GO TO
 IF
 INTEGER
 LOCAL
 LOGICAL
 LONGREAL, または LONG REAL
 NEG
 NEGABS
 NULL
 OF
 OVERFLOW
 PROCEDURE
 REAL
 REGISTER
 RETURN
 SEGMENT
 STEP
 STOP
 SYN
 SHLA
 SHRA
 SHLL
 SHRL
 SHORTINTEGER, または SHORT INTEGER
 THEN
 UNTIL
 WHILE
 .LT.
 .LE.
 .GT.
 .GE.
 .EQ.

. N E .
 OR
 AND
 NOT
 XOR
 +
 -
 *
 /
 ++
 --
 =
 (
)
 ((
))
 .
 ..
 ▽
 ▽▽
 ¥

5. 定 数

GPLで使用できる定数には正負の符号のつかない、整定数、実定数、8進定数、文字定数がある。

禁止事項

+, -の記号は実数を表示する場合に、指数部の正負の符号として用いられる場合以外はすべて演算子記号である。したがって数値の正負を指定する符号として用いてはならない(第1版)。

5.1 整数

(1) 非負整定数

英字, 特殊文字を除く数字の並びで10桁^{*1}以内の10進数である。

例

0

1234567890

. N E .
 OR
 AND
 NOT
 XOR
 +
 -
 *
 /
 ++
 --
 =
 (
)
 ((
))
 .
 ..
 ▼
 ▼▼
 ¥

5. 定 数

GPLで使用できる定数には正負の符号のつかない、整定数、実定数、8進定数、文字定数がある。

禁止事項

+, -の記号は実数を表示する場合に、指数部の正負の符号として用いられる場合以外はすべて演算子記号である。したがって数値の正負を指定する符号として用いてはならない(第1版)。

5.1 整数

(1) 非負整定数

英字, 特殊文字を除く数字の並びで10桁^{*1}以内の10進数である。

例

0

1234567890

誤りの例

- 1 2 3 (符号付定数は許さない。)

1 2 3 (空白*2を途中に入れてはならない。)

なお負整数定数については注意*3を参照のこと。

注意

*1 計算機により異なる。FACOM230-60では -2^{35} 以上 $2^{35}-1$ 以下の数である。

*2 空白は区切記号であるため特に認めるもの以外は、数字又は文字の列はそこで終つたものとみなす。

5.2 実定数

(1) 非負実定数

基本非負実定数は非負整数部と小数点、および小数部をこの順に書いたものである。非負整数部と小数部は両方とも数字の列であらわされ、これらの列の一方は空であつてもよいが、両方とも空であつてはならない。小数点は・であらわす。指数部は文字Eとそれに続く正、負の符号又は空白と非負整数部とで書かれ、定数は $0 \sim 76^{*4}$ までの数である。空白は正の符号とみなす。

非負実定数は、基本非負実定数か基本非負実定数の後に指数部を書いたものか、または非負整数部の後に指数部を書いたものとする。

例

$n, m, E \pm S$ をそれぞれ整数部、小数部、指数部とすると

$n \cdot m \quad n \cdot \quad \cdot m$

$n E + S$ ($n E \square S$ でもよい。)

$n \cdot m E + S$

$n \cdot m E - S$

誤りの例

+ n · m (符号付実定数は認めない。)

n · m E - S (この位置で空白は許されない。)

なお負実定数については下の注意を参照のこと。

注意

*3 負の整数、または実数を使用する場合は、単項演算子(7.演算を参照)を用いるか、あるいは負整数部の場合

$I = 0 -$ 非負整数部

負実定数の場合

$A = 0 \cdot -$ 非負実定数

の演算結果としてもとめる(第1版)。

*4 計算機により異なる。FACOM230-60では実定数は符号を含めて数値部27ビット、指数部9ビットから構成されている。したがつて仮数部は10進数にして約7.8桁、指数部は約 ± 76 の範囲である。

5.3 8進定数

0から7までの数字の列の後に \bar{O} をつけて表現した12桁^{*5}の数

例

2 3 4 5 6 7 1 \bar{O}
7 7 7 7 \bar{O}

誤りの例

1 2 3 □ 3 4 5 \bar{O} (数字の並びの中の空白は許されない)
- 7 7 7 7 7 7 \bar{O} (符号付定数は許されない)
 \bar{O} 7 7 7 0 0 0 (\bar{O} は数字の並びの最後に書く。)
7 8 9 \bar{O} (8 , 9 は許されない。)

*5 計算機により異なる。FACOM230-60では12桁までの数である。

5.4 文字定数

▼▼と▼▼の間に書かれた文字は文字定数とみなす。文字定数は4文字までで空白も文字とみなす。またこの中に書かれた¥記号には特別な意味を持たせない。文字定数として▼▼は認めない。

例

▼▼ A B C D ▼▼
▼▼ A □ ▼ S ▼▼

誤りの例 { ▼ ▼ (▼▼ で囲まなければならない。)
▼▼ ▼▼ ▼▼ (▼▼ は文字定数として許されない。)

6. 名 前

変数，名札，配列，手続，関数に与えられる20文字までの英数字の並びで，頭文字が英字のもの，この並びの中に空白を入れてはならない。外部で参照される共通領域名，手続名などで結合プログラム(linkage editor)の処理の対象となる名前は6文字以内でなければならない。

例

GENKEN

U235

MATRIX

誤りの例

GEN KEN

(空白を入れてはならない。)

2H2O

(頭文字は英字でなければならない。)

6.1 変数

数を保存する計算機の主記憶の番地に名まえを与え，その名まえを変数という。定数も変数の1種であるが，特にことわらない限りは，変数というときには定数を含めない。主記憶の1語はセル(cell)とも呼ばれ，変数を特にセル変数とよぶことがある。ひとつのブロックのなかで宣言された変数は，その型と名まえが，そのブロックにおいては一意的に定められている。したがって，同一のブロックでは同じ名まえをもつ変数を2度宣言することはできない。

変数は添字をもつことができるが，そのときは X_i をインデックス・レジスタ名， n を正整数として $X_i \pm n$ か n の形式の添字のみが許される。配列は1次元の配列のみが許される。したがって， A を配列名とすると $A(X_i \pm n)$ ， $A(n)$ の形式の変数が許される。

6.2 文

GPLにおいて文は実行時の動作を記述するためである。文の区切りは通常は $\$$ 記号によるが，elseとまえの文の間に $\$$ 記号をおいてはならない。

例 $a = b + c$ $\$$

if $a \cdot EQ \cdot d$ then $a = a + d$ else $a = a - d$ $\$$

6.3 レジスタ

FACOM230-60用GPLでプログラマが指定できるレジスタは，インデックス・レジスタ X_0, \dots, X_6 とベース・レジスタ B_0 のみである。インデックス・レジスタ $X_0 \sim X_6$ はハードウェアのインデックス・レジスタ $X_1 \sim X_7$ に対応する。これらのレジスタを使つて乗算，除算は許されない。正負の符号のない加減算のみが許される。 B_0 のうえでは加減乗除算ともに認められない。

7. 演算

レジスタ，またはセルに対する演算にはつぎの種類がある。

7.1 算術演算

加算(+), 減算(-), 乗算(*), 除算(/), 非正規化加算 (unnorm alized) (++) , 非正規化減算 (--)。算術演算はレジスタに対して，この演算記号の右側にある変数(定数を含む)が作用する形式でおこなわれる。したがって結果はつねにレジスタに残っている。演算は左から右へとおこなわれるから，演算の結果，すなわち式の値はFORTRANなどの式と異なることに注意しなければならない。

例 $1 + 3 * 9 + 5$

これは定数の演算であるが，計算の過程を図で示すとつぎのようになる：

演算レジスタ R ₀	式	意味
1	1	$R_0 \leftarrow 1$
4	+ 3	$R_0 \leftarrow R_0 + 3$
36	* 9	$R_0 \leftarrow R_0 * 9$
41	+ 5	$R_0 \leftarrow R_0 + 5$

したがって代入文 $A = 1 + 3 * 9 + 5$ でAに保存される値は33ではなく41である。

7.2 論理演算

論理演算には論理積(ビット単位の and) , 論理和(ビット単位の or) , 排他論理和(ビット単位の xor) がある。演算の方法，順序などは算術演算と同じである。

例 $A \text{ and } B \text{ or } C$

7.3 シフト演算

シフト演算には左論理シフト (shla) , 右論理シフト (shra) , 左倍長算術シフト (snll) , 右倍長算術シフト (shrl) がある。単精度シフトでは論理シフト演算となるから注意しなければならない。(FACOM230-60ではA-overfeowがおきない。)またシフト演算子の右にくるのは非負の整数でなければならない。

例 $K \text{ shla } 8$

7.4 単項演算

単項演算には絶対値をとる演算 (abs) , 逆符号数をとる演算 (neg) , 逆符号数の絶対値をとる演算 (negabs) がある。これらの演算はひとつの変数(定数を含む)に対しておこなわれるので単項演算の名がある。これらの演算は1つの式のなかでは，ただ1回だけ，しかも式のはじめにのみ使用することができる。

例 $\text{abs } A$

注意

- (1) いずれの演算においても演算子の左右の変数(定数を含む)の型が異つてはならない。
- (2) 変数はレジスタ名であつてはならない。

8. 式

つぎにのべるセル式とインデックス・レジスタ式とを合せて式という。式のなかでは型の異なる変数(定数を含む)の混合演算は許されない。

8.1 セル式

上の(1)~(4)の組合せで得られる演算のつながりをセル式という。(4)の演算は式の先頭でのみ定義することができる。セル式では、式中出现するのはセル変数(定数を含む)である。

例

```
abs FIND and MASK + 3
K shla 18 or ADDRESS
```

8.2 レジスタ式

X_i をインデックス・レジスタとすると、

$X_i \pm n$ (n は非負の整数)

の演算形式をインデックス・レジスタ式という。インデックス・レジスタが出現する式はつねにこの形式でなければならない。

9. 代入文

代入文にはつぎのようなものがある。

9.1 セル代入文

これは等号の右辺の演算結果を左辺の変数番地に格納する操作を示す文である。

形式

変数 = 式

禁止事項

- (1) 変数はレジスタであつてはならない。
- (2) 変数は同義語(SYNONYM)宣言でレジスタと結びつけられてはならない。

注意

- (1) いずれの演算においても演算子の左右の変数（定数を含む）の型が異つてはならない。
- (2) 変数はレジスタ名であつてはならない。

8. 式

つぎにのべるセル式とインデックス・レジスタ式とを合せて式という。式のなかでは型の異なる変数（定数を含む）の混合演算は許されない。

8.1 セル式

上の(1)~(4)の組合せで得られる演算のつながりをセル式という。(4)の演算は式の先頭でのみ定義することができる。セル式では、式中出现するのはセル変数（定数を含む）である。

例

```
abs FIND and MASK + 3
K shla 18 or ADDRESS
```

8.2 レジスタ式

X_i をインデックス・レジスタとすると、
 $X_i \pm n$ (n は非負の整数)

の演算形式をインデックス・レジスタ式という。インデックス・レジスタが出現する式はつねにこの形式でなければならない。

9. 代入文

代入文にはつぎのようなものがある。

9.1 セル代入文

これは等号の右辺の演算結果を左辺の変数番地に格納する操作を示す文である。

形式

変数 = 式

禁止事項

- (1) 変数はレジスタであつてはならない。
- (2) 変数は同義語 (SYNONYM) 宣言でレジスタと結びつけられてはならない。

9.2 レジスタ代入文

これは符号の右辺の演算結果を符号の左辺のレジスタへ格納する操作を示す文である。

形式

$$\boxed{\text{レジスタ名} = \text{式}}$$

例

$$X1 = I + J * K$$

禁止事項

左辺がベース・レジスタ B_i であるときには、右辺の式はセルでなければならない。

9.3 多重代入文

これは等号の右辺の変数（定数を含む）の値を左辺のいくつかの変数に移す操作を示す文である。

形式

$$((\text{変数}, \text{---}, \text{変数})) = \text{変数}$$

例

$$((A(X0 + 1), B(X0), \text{---}, C)) = D(X3)$$

このとき等号の左辺と右辺の変数（定数を含む）の型は一致していなくてはならない。

禁止事項

等号の右辺にレジスタ名を書いてはならない（第1版）。等号の左辺にレジスタ名を書いてはならない。

9.4 ベクトル代入文

これは等号の右辺の変数の並びの値を左辺の変数を先頭とする連続した番地へ移す操作を示す文である。

形式

$$\boxed{\text{変数} = ((\text{変数}, \text{---}, \text{変数}))}$$

このとき等号の左辺と右辺の型は一致していなくてはならない。

例

$$P(X0) = ((A(X0), B, C(X1)))$$

この例の文によつて引きおこされる操作は、つぎの文の列の操作と同値である：

$$P(X0) = A(X0) \quad \forall \quad P(X0 + 1) = B \quad \forall \quad P(X0 + 2) = C(X1)。$$

左辺の変数が配列でないときは、型宣言でとられた連続する番地に右辺の値が移される。

例

$$\text{real } P1, P2, P3, P4 \quad \forall$$

$$P1 = ((A(X0), B, C(X1)))$$

は

$$P1 = A(X0) \quad \text{¥} \quad P2 = B \quad \text{¥} \quad P3 = C(X1)$$

と同じ操作を意味する。

禁止事項

等号の左辺，右辺の変数はレジスタ名，名札（レイベル）であつてはならない。

10. 空 (null) 文

1つの空文に対して1つの no operation 命令が作り出される。したがつて空文は no operation の命令を作り出す働きをもつ。

形式

<code>null</code>

例

```
goto      JUMP ¥
```

```
JUMP.. null ¥
```

```
    A = B ¥
```

この例でプログラムの論理的な流れは

```
JUMP.. A = B ¥
```

と同じであるが，null 文によつて no operation 命令が作られている点異なる。

11. 手続き参照 (procedure) 文

手続き (procedure) 文は，この文で指定された手続き (procedure) の本体 (procedure body) を起動する働きをもつ。本体の実行後プログラムの制御は，この procedure 文のつぎの文に移る。ただし，起動された本体が，goto 文，function 文，あるいは他の手続き (procedure) 文を実行することでプログラムの制御を放棄するときはこの限りではない。

形式

<code>手続き名</code>

<code>手続き名 (実パラメータ, ---, 実パラメータ)</code>

手続き名 (procedure name) は，それが手続き参照文によつて呼び出されるときは，他の場所で手続き宣言 (procedure declaration) によつて定義されていなければならない。手続き名が参照されるときは，参照するプログラムと参照される手続きとの間の情報の受け渡

は

$P1 = A(X0) \quad \forall \quad P2 = B \quad \forall \quad P3 = C(X1)$

と同じ操作を意味する。

禁止事項

等号の左辺，右辺の変数はレジスタ名，名札（レイベル）であつてはならない。

10. 空 (null) 文

1つの空文に対して1つの no operation 命令が作り出される。したがつて空文は no operation の命令を作り出す働きをもつ。

形式

<code> null </code>

例

`goto JUMP ¥`

`JUMP.. null ¥`

`A = B ¥`

この例でプログラムの論理的な流れは

`JUMP.. A = B ¥`

と同じであるが，null 文によつて no operation 命令が作られている点異なる。

11. 手続き参照 (procedure) 文

手続き (procedure) 文は，この文で指定された手続き (procedure) の本体 (procedure body) を起動する働きをもつ。本体の実行後プログラムの制御は，この procedure 文のつぎの文に移る。ただし，起動された本体が，goto 文，function 文，あるいは他の手続き (procedure) 文を実行することでプログラムの制御を放棄するときはこの限りではない。

形式

<code> 手続き名 </code>

<code> 手続き名 (実パラメータ, ---, 実パラメータ) </code>

手続き名 (procedure name) は，それが手続き参照文によつて呼び出されるときは，他の場所で手続き宣言 (procedure declaration) によつて定義されていなければならない。手続き名が参照されるときは，参照するプログラムと参照される手続きとの間の情報の受け渡

は

$P1 = A(X0) \quad \forall \quad P2 = B \quad \forall \quad P3 = C(X1)$

と同じ操作を意味する。

禁止事項

等号の左辺，右辺の変数はレジスタ名，名札（レイベル）であつてはならない。

10. 空 (null) 文

1つの空文に対して1つの no operation 命令が作り出される。したがつて空文は no operation の命令を作り出す働きをもつ。

形式

null

例

goto JUMP \forall

JUMP.. null \forall

A = B \forall

この例でプログラムの論理的な流れは

JUMP.. A = B \forall

と同じであるが，null 文によつて no operation 命令が作られている点異なる。

11. 手続き参照 (procedure) 文

手続き (procedure) 文は，この文で指定された手続き (procedure) の本体 (procedure body) を起動する働きをもつ。本体の実行後プログラムの制御は，この procedure 文のつぎの文に移る。ただし，起動された本体が，goto 文，function 文，あるいは他の手続き (procedure) 文を実行することでプログラムの制御を放棄するときはこの限りではない。

形式

手続き名

手続き名 (実パラメータ，---，実パラメータ)

手続き名 (procedure name) は，それが手続き参照文によつて呼び出されるときは，他の場所で手続き宣言 (procedure declaration) によつて定義されていなければならない。手続き名が参照されるときは，参照するプログラムと参照される手続きとの間の情報の受け渡

しは、つぎのいずれかの方法による：

- (1) パラメータの受け渡し(例1)。
- (2) 領域定義文(segment文)によつて定義された領域の共有(例2)。
- (3) 参照される手続きを含むブロックの変数を共用する(参照される手続きが、この手続きを参照するプログラムに含まれているとき。)(例3)。
- (4) レジスタの共用
- (5) モニタの特定領域、ハードウェアの特定の機能(P SW, program status word など)、システム・ルーチンなどの利用。

上記の方法で翻訳、実行の効率ともにくれていているものからならべると、(4)、(3)、(2)、(1)、(5)の順となる。レジスタに多くの情報をのせることはできないから、実用的な見地からいえば、(3)、(2)、(1)の方法が一般的といえる。プログラム単位(翻訳単位)を異にする手続きとの情報の受け渡しは(2)の方法によるのが理想的である。

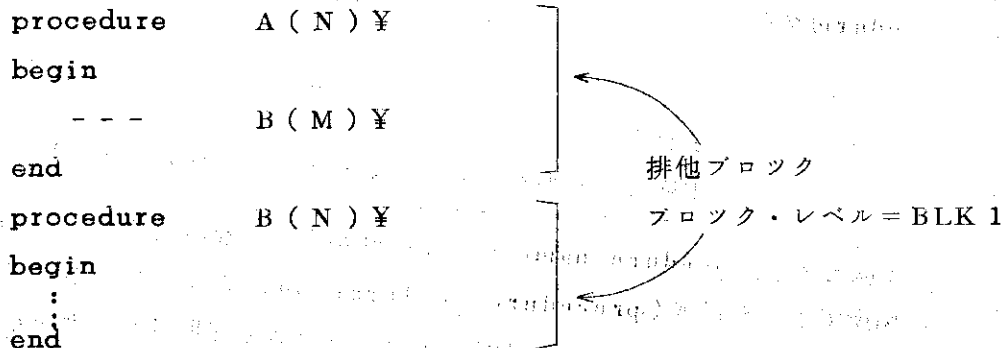
注意

- (1) FACOM230-60 GPLではFACOM230-60 FORTRANとの結合をはかるために、手続きを参照する直前にA-レジスタにパラメータ数をのせる。したがつてA-レジスタを利用して情報の授受はできない。
- (2) パラメータのベース・レジスタは、参照された手続きのなかで指定された(仮パラメータの)ベース・レジスタが使用される。
- (3) FACOM230-60用GPLの手続き参照文 $proc(A_1, \dots, A_n)$ の翻訳された命令の列はつぎのようになつている：

```

L A I      n
S X J , 7  PROC
NOP      A1
      ⋮
NOP      An
    
```

- (4) GPLの手続き宣言で定義された手続きが参照されたときは、その手続きはパラメータ数のチェックをおこなわない。
- (5) 下図のように互いに排他的なブロックをなす手続き宣言によつて定義された手続きAは、Bを参照することができる。ただし、このときこれらの宣言を含む翻訳単位のブロック・レベルは制御カード*GPLでBLK0と指定されてはならない。



(6) 手続き参照によつて現在実行中のプログラムから参照された手続きに制御が移されるときには、インデックス・レジスタ X 6 が実行中のプログラムの命令番地を保存する。

禁止事項

- (1) パラメータに手続き名を指定してはならない。
- (2) パラメータにレジスタ名を指定してはならない。
- (3) パラメータに領域(セグメント)名を指定してはならない。
- (4) パラメータに変数以外の式を指定してはならない。
- (5) パラメータに名札(レイベル)を指定してはならない(第1版)。
- (6) パラメータに4文字を超える文字定数を指定してはならない。
- (7) 再帰的な手続き参照は許されない(例4)。

例1. `procedure exchange (X , Y) ¥`
`begin real X , Y , T ¥`
`T = X ¥ X = Y ¥ Y = T ¥`
`end ¥`
`exchange (M(1) , M (X 3)) ¥`

例2.

```

procedure exchange ¥
begin segment base // ¥
begin real X , Y , T ¥ end ¥
T = ¥ X = Y ¥ Y = T ¥
end ¥

```

この手続き exchange と翻訳単位を異にするプログラムで

```

begin segment base // ¥
begin real X , Y , T ¥ end
:
exchange ¥

```

となつていれば、領域名 // (ブランク・コモン) で X , Y , T を共有している。

例3.

```

begin real X , Y , T ¥
procedure exchange ¥
begin
T = X ¥ X = Y ¥ Y = T ¥
end ¥

```

となつているときは、exchange を含むプログラム単位で X , Y , T が定義されている。

例4.

```

procedure A ¥
begin --- B ( N ) ¥ --- end ¥
procedure B ( M ) ¥

```

`begin --- A ¥ --- end ¥`

このときは手続き A と B は互いに参照し合っており参照が再帰的となる。

12. case 文

(1) 場合 (case) 文は, `begin` と `end` でくくられたいくつかの文のうちから, インデックス・レジスタの内容に対応するひとつの文を選び出して実行する。選び出された文が実行されたあとのプログラムの制御は, `end` のあとに続く文に移る。

形式

<pre> case Xi of begin 第1文 ¥ 第2文 ¥ ⋮ 第n文 ¥ end </pre>

インデックス・レジスタ X_i の内容は整数 1 から n までの範囲の数でなければならない。インデックス・レジスタ X_i の内容が整数 j のときは, 第 j 番目の文が実行され, その後プログラムの制御は `end` のあとに続く文に移る。実行された文が `goto` 文を含んでいると, その `goto` 文によつて制御が他の文に移ることもある。

例

```

X1 = 2 ¥
case X1 of begin
LABEL1 .. goto ASTER ¥
LABEL2 .. begin I = J * 2 + K ¥ L = M ¥
           goto LABEL1 ¥ end ¥
           end ¥

```

この例では, X_1 の値が 2 であるから, まず文 `LABEL2 .. begin --- end` が実行される。この文は `LABEL1` への `goto` 文を実行し, 制御は `ASTER` なる名札を持つた文に移る。

(2) コンパイルの方法

`case` 文の翻訳された結果はつぎのようになっている。

```

⋮
jump A, Xi
S1 .. 第1文の命令群
      Jump C
⋮
Sn .. 第n文の命令群

```

`begin --- A ¥ --- end ¥`

このときは手続き A と B は互いに参照し合っており、参照が再帰的となる。

12. case 文

(1) 場合 (case) 文は、`begin` と `end` でくくられたいくつもの文のうちから、インデックス・レジスタの内容に対応するひとつの文を選び出して実行する。選び出された文が実行されたあとのプログラムの制御は、`end` のあとに続く文に移る。

形式

<code>case Xi of begin</code>
第1文 ¥
第2文 ¥
⋮
第n文 ¥ <code>end</code>

インデックス・レジスタ X_i の内容は整数 1 から n までの範囲の数でなければならない。インデックス・レジスタ X_i の内容が整数 j のときは、第 j 番目の文が実行され、その後プログラムの制御は `end` のあとに続く文に移る。実行された文が `goto` 文を含んでいると、その `goto` 文によつて制御が他の文に移ることもある。

例

```

X1 = 2 ¥
case X1 of begin
LABEL1 .. goto ASTER ¥
LABEL2 .. begin I = J * 2 + K ¥ L = M ¥
           goto LABEL1 ¥ end ¥
           end ¥

```

この例では、 X_1 の値が 2 であるから、まず文 `LABEL2 .. begin --- end` が実行される。この文は `LABEL1` への `goto` 文を実行し、制御は `ASTER` なる名札を持つた文に移る。

(2) コンパイルの方法

`case` 文の翻訳された結果はつぎのようになっている。

```

⋮
jump A, Xi
S1 .. 第1文の命令群
Jump C
⋮
Sn .. 第n文の命令群

```

Jump C
A.. Jump S₁
⋮
Jump S_n

C..

禁止事項

- (1) X_i にインデックス・レジスタ以外のレジスタ名，変数名，名札などを指定してはならない。

13. goto 文

goto 文は、この文で指定された名札をもつ文にプログラムの制御を移す働きをもつ。

形式

goto L

注意

- (1) goto 文で指定された名札は、label宣言されていなくてもよいが、同一のプログラム（翻訳）単位のなかで定義されていなければならない。

禁止事項

- (1) 名札以外の変数（定数を含む）、式、または文を名札として使つてはならない。

14. if 文

if 文について述べるまえに、if 文を構成する重要な要素のひとつである「条件」について説明しよう。

- (1) A, B をそれぞれ変数（定数を含む）、R を集合 { .EQ., .NE., .LT., .LE., .GE., .GT. } の1つの要素とすると、A R B を単純条件と呼ぶ。
- (2) C1, C2 が単純条件であるとき、C1 and C2 と C1 or C2 を複合条件と呼ぶ。
- (3) C1 が複合条件、C2 が単純条件であるとき、C1 and C2 と C1 or C2 も複合条件と呼ぶ。
- (4) 単純条件、複合条件を合せて条件と呼ぶ。
- (5) 条件はつねに真か偽かのいずれかの値をとる。
- (6) 複合条件はつねに左から右へと計算される。

if 文にはつぎの2つの形式がある：

if	条件	then	文	(t1)		
if	条件	then	無条件文	else	文	(t2)

形式 (t1) のとき、条件が真の値をとれば then のつぎの文が実行される。条件が偽の値をとれば then のつぎの文は実行されず、プログラムの制御はこの文のつぎの文に移る。

形式 (t2) のとき、条件が真の値をとれば then のつぎの無条件文が実行される。条件が偽の値をとれば else のつぎの文が実行される。いずれの場合にも該当する文の実行後のプログラムの制御は、この if 文のつぎの文に移る。

注意

- (1) 複合条件

$$C_1 \text{ and } C_2 \text{ and } \dots \text{ and } C_{n-1} \text{ and } C_n$$

13. goto 文

goto 文は、この文で指定された名札をもつ文にプログラムの制御を移す働きをもつ。

形式

```
goto L
```

注意

- (1) goto 文で指定された名札は、label宣言されていなくてもよいが、同一のプログラム（翻訳）単位のなかで定義されていなければならない。

禁止事項

- (1) 名札以外の変数（定数を含む）、式、または文を名札として使つてはならない。

14. if 文

if 文について述べるまえに、if 文を構成する重要な要素のひとつである「条件」について説明しよう。

- (1) A, B をそれぞれ変数（定数を含む）、R を集合 { .EQ., .NE., .LT., .LE., .GE., .GT. } の1つの要素とすると、A R B を単純条件と呼ぶ。
- (2) C1, C2 が単純条件であるとき、C1 and C2 と C1 or C2 を複合条件と呼ぶ。
- (3) C1 が複合条件、C2 が単純条件であるとき、C1 and C2 と C1 or C2 も複合条件と呼ぶ。
- (4) 単純条件、複合条件を合せて条件と呼ぶ。
- (5) 条件はつねに真か偽かのいずれかの値をとる。
- (6) 複合条件はつねに左から右へと計算される。

if 文にはつぎの2つの形式がある：

if 条件 then 文	(t1)
if 条件 then 無条件文 else 文	(t2)

形式 (t1) のとき、条件が真の値をとれば then のつぎの文が実行される。条件が偽の値をとれば then のつぎの文は実行されず、プログラムの制御はこの文のつぎの文に移る。

形式 (t2) のとき、条件が真の値をとれば then のつぎの無条件文が実行される。条件が偽の値をとれば else のつぎの文が実行される。いずれの場合にも該当する文の実行後のプログラムの制御は、この if 文のつぎの文に移る。

注意

- (1) 複合条件

$$C_1 \text{ and } C_2 \text{ and } \dots \text{ and } C_{n-1} \text{ and } C_n$$

は、すべての単純条件 C_i が真であるときに真となる。

複合条件

$$C_1 \quad \text{or} \quad C_2 \quad \text{or} \quad \dots \quad C_{n-1} \quad \text{or} \quad C_n$$

は、左から右へと単純条件 C_i を判定してゆき、どれかひとつの単純条件 C_i が真であるときに真となる。

(2) 複合条件はつねに左から右へと判定されるから、

$$C_1 \quad \text{or} \quad C_2 \quad \text{and} \quad C_3 \quad \text{and} \quad C_4 \quad \text{or} \quad C_5$$

の計算の順序をカッコで示せば、

$$(((C_1 \quad \text{or} \quad C_2) \quad \text{and} \quad C_3) \quad \text{and} \quad C_4) \quad \text{or} \quad C_5)$$

となる。

例

```
if MAX.GE.X3 then X3=X3+1
if MAX.GE.X3 or MAX.GE.K then X3=X3+1
else begin MAX=MAX+1 ¥ X4=X4-1 ¥ end
```

(3) FACOM230-60 版 GPL では条件の値はどのようなレジスタにも保存されず、プログラムの流れとして表現されるから、ひとつの条件の値を他の場所において参照することはできない。

15. while 文

`while` 文はこの文の複合条件が真の値をとつている間は、`do` のあとに続く文を繰り返して実行する。`while` 文を使用すると、`if` 文と `for` 文の組合せでは簡潔にかけない演算を簡単に記述することができる。

形式

<code>while</code>	複合条件	<code>do</code>	文
--------------------	------	-----------------	---

注意

- (1) 複合条件の計算方法は `if` 文と同じである。
- (2) `while` 文は条件が満たされている限りは `do` のあとの文を繰り返して実行するから、この文中に条件の成立を変化させる要因が存在しなければならない。

例

```
while X1.LT.5 do begin A(X1+1)=0 ¥ X1=X1+1 ¥ end
```

16. for 文

`for` 文では、`for` のあとに続くインデックス・レジスタの X_i の内容が、その初期値か

は、すべての単純条件 C_i が真であるときに真となる。

複合条件

$$C_1 \text{ or } C_2 \text{ or } \dots \text{ or } C_{n-1} \text{ or } C_n$$

は、左から右へと単純条件 C_i を判定してゆき、どれかひとつの単純条件 C_i が真であるときに真となる。

(2) 複合条件はつねに左から右へと判定されるから、

$$C_1 \text{ or } C_2 \text{ and } C_3 \text{ and } C_4 \text{ or } C_5$$

の計算の順序をカッコで示せば、

$$(((C_1 \text{ or } C_2) \text{ and } C_3) \text{ and } C_4) \text{ or } C_5)$$

となる。

例

```
if MAX.GE.X3 then X3=X3+1
```

```
if MAX.GE.X3 or MAX.GE.K then X3=X3+1
```

```
else begin MAX=MAX+1 Y X4=X4-1 Y end
```

(3) FACOM230-60 版 GPL では条件の値はどのようなレジスタにも保存されず、プログラムの流れとして表現されるから、ひとつの条件の値を他の場所において参照することはできない。

15. while 文

`while` 文はこの文の複合条件が真の値をとつている間は、`do` のあとに続く文を繰り返し実行する。`while` 文を使用すると、`if` 文と `for` 文の組合せでは簡潔にかけない演算を簡単に記述することができる。

形式

<code>while</code>	複合条件	<code>do</code>	文
--------------------	------	-----------------	---

注意

(1) 複合条件の計算方法は `if` 文と同じである。

(2) `while` 文は条件が満たされている限りは `do` のあとの文を繰り返して実行するから、この文中に条件の成立を変化させる要因が存在しなければならぬ。

例

```
while X1.LT.5 do begin A(X1+1)=0 Y X1=X1+1 Y end
```

16. for 文

`for` 文では、`for` のあとに続くインデックス・レジスタの X_i の内容が、その初期値か

は、すべての単純条件 C_i が真であるときに真となる。

複合条件

$$C_1 \quad \text{or} \quad C_2 \quad \text{or} \quad \dots \quad C_{n-1} \quad \text{or} \quad C_n$$

は、左から右へと単純条件 C_i を判定してゆき、どれかひとつの単純条件 C_i が真であるときに真となる。

(2) 複合条件はつねに左から右へと判定されるから、

$$C_1 \quad \text{or} \quad C_2 \quad \text{and} \quad C_3 \quad \text{and} \quad C_4 \quad \text{or} \quad C_5$$

の計算の順序をカッコで示せば、

$$(((C_1 \quad \text{or} \quad C_2) \quad \text{and} \quad C_3) \quad \text{and} \quad C_4) \quad \text{or} \quad C_5)$$

となる。

例

```
if MAX.GE.X3 then X3=X3+1
if MAX.GE.X3 or MAX.GE.K then X3=X3+1
else begin MAX=MAX+1 ¥ X4=X4-1 ¥ end
```

(3) FACOM230-60 版 GPL では条件の値はどのようなレジスタにも保存されず、プログラムの流れとして表現されるから、ひとつの条件の値を他の場所において参照することはできない。

15. while 文

`while` 文はこの文の複合条件が真の値をとつている間は、`do` のあとに続く文を繰り返して実行する。`while` 文を使用すると、`if` 文と `for` 文の組合せでは簡潔にかけない演算を簡単に記述することができる。

形式

<code>while</code>	複合条件	<code>do</code>	文
--------------------	------	-----------------	---

注意

- (1) 複合条件の計算方法は `if` 文と同じである。
- (2) `while` 文は条件が満たされている限りは `do` のあとの文を繰り返して実行するから、この文中に条件の成立を変化させる要因が存在しなければならない。

例

```
while X1.LT.5 do begin A(X1+1)=0 ¥ X1=X1+1 ¥ end
```

16. for 文

`for` 文では、`for` のあとに続くインデックス・レジスタの X_i の内容が、その初期値か

ら step に続く定められたきざみによつて増加し、until に続く上限に到達するまで do に続く文が繰り返して実行される。Xi の内容が上限を越えると、この文は実行されず、プログラムの制御はこの文のあとに続く文に移される。

形式

```
for Xi=式 step 正整数 until 上限 do 文
```

注意

- (1) 上限には正整数、インデックス・レジスタ名、セル変数を指定することができる。
- (2) Xi と上限との内容の比較は文の実行が始まる前におこなわれる。
- (3) 式は正の整数値をとらなければならない。

禁止事項

- (1) 上限に負の値をもつものを指定してはならない（第1版）。
- (2) until に続くきざみに負の整数を指定してはならない。
- (3) forのあとに続く変数にインデックス・レジスタ名以外の変数（定数を含む）を指定してはならない。

例

```
for X1=I+1 step 2 until K do
begin integer K,L ¥
K=M(X1) ¥ M(X1)=N(X2) ¥ L=X2 ¥
PROC(L)¥
end ¥
```

この例で for文の上限を与える変数Kと、begin のあとに新しく定義された変数Kとは番地も内容も異なる。（この点については 2.2 ブロックを参照のこと。）

17. セル宣言 (Cell Declarations)

主記憶に番地をもち、そこに数値化された内容を保存する変数をセル変数と呼び、これをレジスタ名、レイベル名、関数名、手続き名などと区別する。セル変数は、それが使用される以前に整数、浮動小数点数などの型と配列についての宣言が必要である。また、これらの変数に初期値を設定することもできる。

形式

```

{ integer }
{ real }   a1, ..., am           (t1)

array n { integer }
         { real }   a1, ..., am   (t2)
```

ら step に続く定められたきざみによつて増加し、until に続く上限に到達するまで do に続く文が繰り返して実行される。Xi の内容が上限を越えると、この文は実行されず、プログラムの制御はこの文のあとに続く文に移される。

形式

```
for Xi=式 step 正整数 until 上限 do 文
```

注意

- (1) 上限には正整数、インデックス・レジスタ名、セル変数を指定することができる。
- (2) Xi と上限との内容の比較は文の実行が始まる前におこなわれる。
- (3) 式は正の整数値をとらなければならない。

禁止事項

- (1) 上限に負の値をもつものを指定してはならない（第1版）。
- (2) until に続くきざみに負の整数を指定してはならない。
- (3) forのあとに続く変数にインデックス・レジスタ名以外の変数（定数を含む）を指定してはならない。

例

```
for X1=I+1 step 2 until K do
begin integer K,L ¥
K=M(X1) ¥ M(X1)=N(X2) ¥ L=X2 ¥
PROC(L)¥
end ¥
```

この例で for文の上限を与える変数Kと、begin のあとに新しく定義された変数Kとは番地も内容も異なる。（この点については 2.2 ブロックを参照のこと。）

17. セル宣言(Cell Declarations)

主記憶に番地をもち、そこに数値化された内容を保存する変数をセル変数と呼び、これをレジスタ名、レイベル名、関数名、手続き名などと区別する。セル変数は、それが使用される以前に整数、浮動小数点数などの型と配列についての宣言が必要である。また、これらの変数に初期値を設定することもできる。

形式

```

{ integer } a1, ..., am (t1)
{ real }

array n { integer } a1, ..., am (t2)
         { real }
```

$$\left. \begin{array}{l} \text{integer} \\ \text{real} \end{array} \right\} a_1 = V_1, \quad \dots, \quad a_m = V_m \quad (t3)$$

$$\text{array } n \left. \begin{array}{l} \text{integer} \\ \text{real} \end{array} \right\} a_1 = (V_1, \dots, V_i), \dots, a_m = (V_1, \dots, V_j) \quad (t4)$$

ここで $\left\{ \begin{array}{l} A \\ B \end{array} \right\}$ とあれば、AまたはBのいずれかを選択することを意味する。

(t1)の宣言では、変数 a_1, \dots, a_m が整数 (integer), または浮動小数点 (real) の型 (type) をもつことを意味する。

(t2)の宣言では、変数 a_1, \dots, a_m が整数、または浮動小数点の型をもつ大きさ n の1次元の配列として定義される。

(t3)の宣言では、整数、または浮動小数点数の型をもつ変数 a_1, \dots, a_m が、それぞれ初期値 V_1, \dots, V_m で定義される。

(t4)の宣言では、整数、または浮動小数点数の型をもつ配列変数 a_1, \dots, a_m が、それぞれ初期値 $a_1(1) = V_1, a_1(2) = V_2, \dots, a_1(i) = V_i (i \leq n), \dots, a_m(1) = V'_j, \dots, a_m(j) = V'_j, (j \leq n)$ で定義される。

注意

(1) (t3), (t4) の宣言で

$$\left. \begin{array}{l} \text{integer} \\ \text{real} \end{array} \right\} a_1 = V_1, \dots, a_i, a_{i+1}, \dots = V_{i+1}, \dots \quad (t3)$$

$$\text{array } n \left. \begin{array}{l} \text{integer} \\ \text{real} \end{array} \right\} a_1 = (V_1, \dots, V_i), \dots, a_i, \dots \quad (t4)$$

と初期値をもたない変数も同時に定義することができる。

(2) それぞれの形式は、それが1体となつて宣言されなければならない。たとえば (t2) で $\text{array } n \text{ A } \forall \text{ integer A } \forall$ と分割して宣言すると誤りとなる。初期値の設定についても同じである。

(3) 初期値として文字定数、負の符号のない整数、正負の符号のない浮動小数点数 (8進数は整数) を指定することができる。

(4) 左辺の型と一致しない型をもつ初期値を与えることができるが、その値は左辺の型に合うようには変換されない。演算は左辺の変数の型でおこなわれる。

(5) ブロックが多層構造になつているとき、なかのブロックで初期値の設定をおこなうと、コンパイラはこの操作をおこなうための命令群を作り出す。これに反して一番外側のブロックでの初期値の設定は、結合プログラム (linkage editor) によつてプログラムのローディング時におこなわれる。(ブロック構造を参照のこと。)

(6) 宣言の終りは ¥ 記号がくる。

例

```
integer    I, J, K ¥
integer    N= 0 ¥
array 3 real F=( 1.0, 2.0, 3.0 ) ¥
integer    A=770, B=760, C=1 ¥
```

18. 同義語宣言 (Synonym Declarations)

同義語宣言は、この宣言にあらわれた変数名とこの宣言がおこなわれるまえに宣言されている変数の属性を結びつける働きをする。

形式

<pre>array n { real } 変数名 syn { 変数 } , , { integer } , 変数名 syn { 変数 } { 定数 } (t1)</pre> <p>変数名を配列として宣言するなら array n が必要である。</p> <pre>{ real } { adcon } { integer } { slcon } 変数名 syn 変数, , , 変数名 syn 変数 (t2)</pre>

(t1) の宣言で変数名 **syn** 変数と宣言されたときは、変数名はこのとき変数をもつ番地を共有する。

(t1) の宣言で変数名 **syn** 定数と宣言されたときは、変数名の番地は定数で示された番地に同じである。すなわち、この定数は機械語の番地そのものを示している。したがって、この定数はベース・レジスタの番号とそのレジスタからの変位 (displacement) を示している。定数がレジスタ番号を含んでいなければ、この変数名のベース・レジスタは B 0 (FACOM 230-60 の場合) が与えられる。

(t2) の宣言では、変数が変数名を別名とする番地定数 (address constant)、またはセグメント・ロード定数 (segment load constant) であることを示す。

例

```
real A syn B (1) ¥
integer I syn C (5) ¥
array 5 integer D syn K ¥
```

(6) 宣言の終りは ¥ 記号がくる。

例

```
integer    I, J, K ¥
integer    N= 0 ¥
array 3 real F=( 1.0, 2.0, 3.0 ) ¥
integer    A=770, B=760, C=1 ¥
```

18. 同義語宣言 (Synonym Declarations)

同義語宣言は、この宣言にあらわれた変数名とこの宣言がおこなわれるまえに宣言されている変数の属性を結びつける働きをする。

形式

<pre>array n { real } 変数名 syn { 変数 } , , { integer } , 変数名 syn { 変数 } { 定数 } (t1)</pre> <p>変数名を配列として宣言するなら array n が必要である。</p> <pre>{ real } { adcon } { integer } { slcon } 変数名 syn 変数, , , 変数名 syn 変数 (t2)</pre>

(t1) の宣言で変数名 **syn** 変数と宣言されたときは、変数名はこのとき変数をもつ番地を共有する。

(t1) の宣言で変数名 **syn** 定数と宣言されたときは、変数名の番地は定数で示された番地に同じである。すなわち、この定数は機械語の番地そのものを示している。したがって、この定数はベース・レジスタの番号とそのレジスタからの変位 (displacement) を示している。定数がレジスタ番号を含んでいなければ、この変数名のベース・レジスタは B 0 (FACOM 230-60 の場合) が与えられる。

(t2) の宣言では、変数が変数名を別名とする番地定数 (address constant)、またはセグメント・ロード定数 (segment load constant) であることを示す。

例

```
real A syn B (1) ¥
integer I syn C (5) ¥
array 5 integer D syn K ¥
```


integer adcon M syn ECB(3) ¥

注意

- (1) 変数名と変数が結びつけられるときに両者の型は異つていてもよい。
- (2) 同義語宣言では初期値は設定されない。
- (3) 番地定数として定義された変数の番地の部分に他の変数の所在を示す番地を入れる宣言はない。たとえば, TACOM230-60 FASP の文

A ADCON FCB

と同じ定義はつぎのようになる:

integer adcon B syn A ¥

:

A = FCB or A ¥

この例からわかるように、実行時にFCBの番地(すなわちベイス・レジスタBiからの変位)を求めて変数Aとの論理和を取ることによってAが正しい番地定数となる。この場合Aはすでにベイス・レジスタの番地を持っていると仮定する。

- (4) プログラムの命令中に番地定数を定義するときはこのような操作は関数を使つておこなう。(関数の定義と参照の項を見よ。)

禁止事項

- (1) 上の(t1),(t2)いずれの宣言においてもA(Xi), A(Xi±C)の形式の変数を指定してはならない。

19. 手続き宣言 (Procedure Declarations)

手続き宣言は、begin で始まり end で終る一群の宣言と文のまとまり(これを手続きの本体という)に1つの名まえ(手続き名)を与え、この手続き名を参照することで手続きの本体の実行を可能とするためである。

形式

procedure	手続き名	¥文	(t1)
procedure	手続き名(仮パラメータ, ..., 仮パラメータ)	¥文	

(t1)の形式では宣言された手続きはパラメータを持たないから、参照するプログラムと参照される手続きとの間の情報の授受は、インデックス・レジスタや共通領域などを通して行なわれることになる。

(t2)の形式では宣言された手続きはパラメータを持つから、情報の授受はこのパラメータを通して行なわれる。

手続き宣言の本体は、begin end のブロックでなければならない。

integer adcon M syn ECB(3) ¥

注意

- (1) 変数名と変数が結びつけられるときに両者の型は異つていてもよい。
- (2) 同義語宣言では初期値は設定されない。
- (3) 番地定数として定義された変数の番地の部分に他の変数の所在を示す番地を入れる宣言はない。たとえば, TACOM230-60 FASP の文

A ADCON FCB

と同じ定義はつぎのようになる:

integer adcon B syn A ¥

:

A = FCB or A ¥

この例からわかるように、実行時にFCBの番地(すなわちベース・レジスタBiからの変位)を求めて変数Aとの論理和を取ることによってAが正しい番地定数となる。この場合Aはすでにベース・レジスタの番地を持っていると仮定する。

- (4) プログラムの命令中に番地定数を定義するときはこのような操作は関数を使つておこなう。(関数の定義と参照の項を見よ。)

禁止事項

- (1) 上の(t1),(t2)いずれの宣言においてもA(Xi), A(Xi±C)の形式の変数を指定してはならない。

19. 手続き宣言 (Procedure Declarations)

手続き宣言は、begin で始まり end で終る一群の宣言と文のまとまり(これを手続きの本体という)に1つの名まえ(手続き名)を与え、この手続き名を参照することで手続きの本体の実行を可能とするためである。

形式

procedure	手続き名	¥文	(t1)
procedure	手続き名(仮パラメータ, ..., 仮パラメータ)	¥	文

(t1)の形式では宣言された手続きはパラメータを持たないから、参照するプログラムと参照される手続きとの間の情報の授受は、インデックス・レジスタや共通領域などを通して行なわれることになる。

(t2)の形式では宣言された手続きはパラメータを持つから、情報の授受はこのパラメータを通して行なわれる。

手続き宣言の本体は、begin end のブロックでなければならない。

手続きの本体の一番外側の end に制御を移せばよい。

例

```

procedure P(X) ¥
begin
    goto FIN ¥
FIN .. end
    
```

この例では goto FIN によつて、この手続き P (X) を呼び出したプログラムに制御が移る。

(b) 副プログラムとしての手続きは。begin のあとに procedure ABC ... と宣言された手続き名 ABC... が結合プログラム (linkage editor) の処理の対象となる。

禁止事項

(1) 仮パラメータに指定できるのはセル変数のみである。インデックス・レジスタ名、定数、手続き名、関数名、レイベル(レイベルについては第1版のみ)などを指定してはならない。

20. 関数宣言 (Function Declarations)

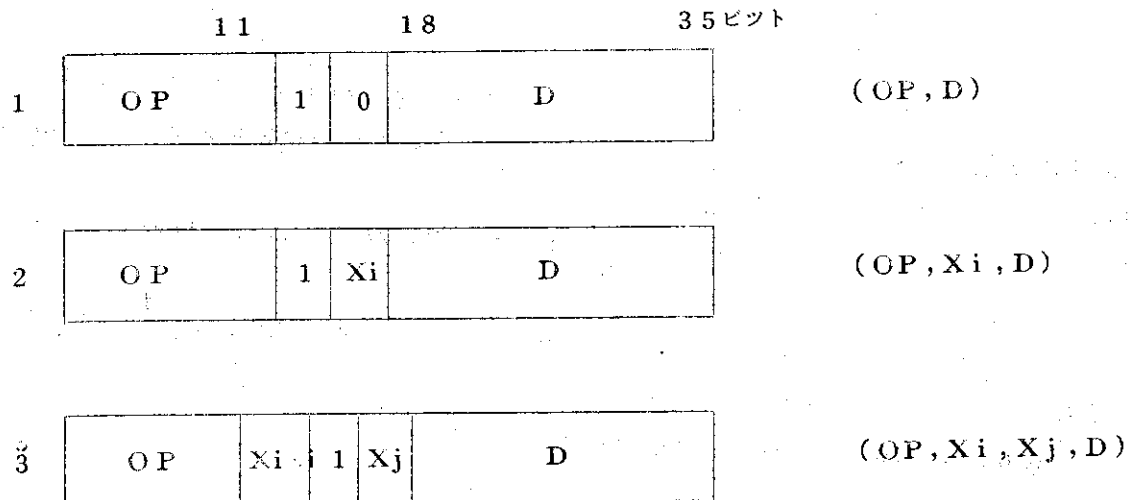
関数宣言は代入文や手続き文では利用できない計算機の命令を使うためである。この機能は GPL が実現された計算機に依存している。ここでは FACOM 230-60 版 GPL についてべる。

形式

function 関数名 (T_i, I_i), ... 関数名 (T_n, I_n)

ここで T_i は Fig. 5. にかかけた命令の形式を示す i から 6 までの整数である。I_i は命令の形式に応じて長さの定まる FACOM 230-60 の命令を 8 進数で与える。関数名は何であつてもよいが、計算機の命令と直接結びついた名前がよい。

形式



手続きの本体の一番外側の end に制御を移せばよい。

例

```

procedure P(X) ¥
begin
    goto FIN ¥
FIN .. end
    
```

この例では goto FIN によつて、この手続き P (X) を呼び出したプログラムに制御が移る。

(b) 副プログラムとしての手続きは、begin のあとに procedure ABC ... と宣言された手続き名 ABC ... が結合プログラム (linkage editor) の処理の対象となる。

禁止事項

(1) 仮パラメータに指定できるのはセル変数のみである。インデックス・レジスタ名、定数、手続き名、関数名、レイベル (レイベルについては第 1 版のみ) などを指定してはならない。

20. 関数宣言 (Function Declarations)

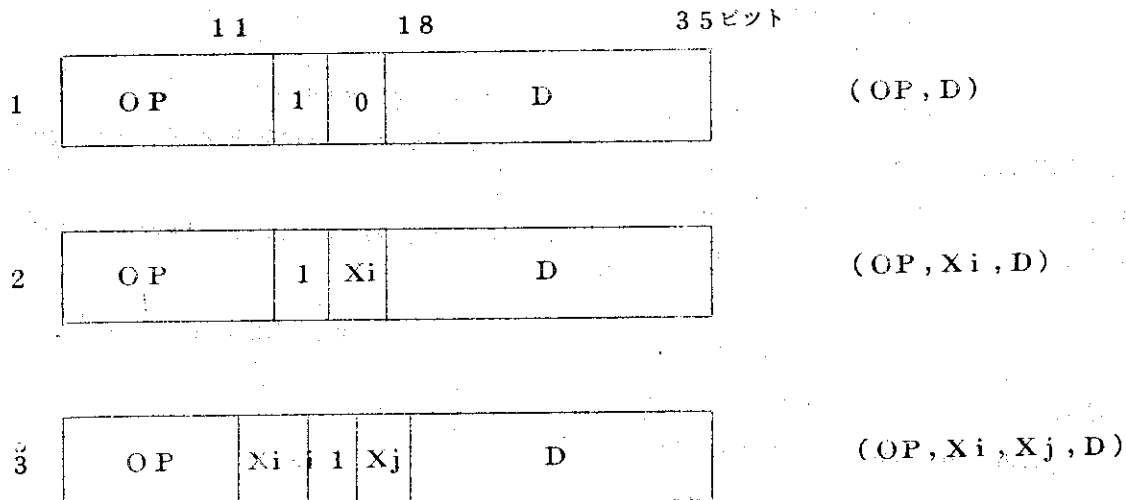
関数宣言は代入文や手続き文では利用できない計算機の命令を使うためである。この機能は GPL が実現された計算機に依存している。ここでは FACOM 230-60 版 GPL についてのべる。

形式

```
function 関数名 (Ti, Ii), ... 関数名 (Tn, In)
```

ここで T_i は Fig. 5. にかかげた命令の形式を示す 1 から 6 までの整数である。 I_i は命令の形式に応じて長さの定まる FACOM 230-60 の命令を 8 進数で与える。関数名は何であつてもよいが、計算機の命令と直接結びついた名前がよい。

形式



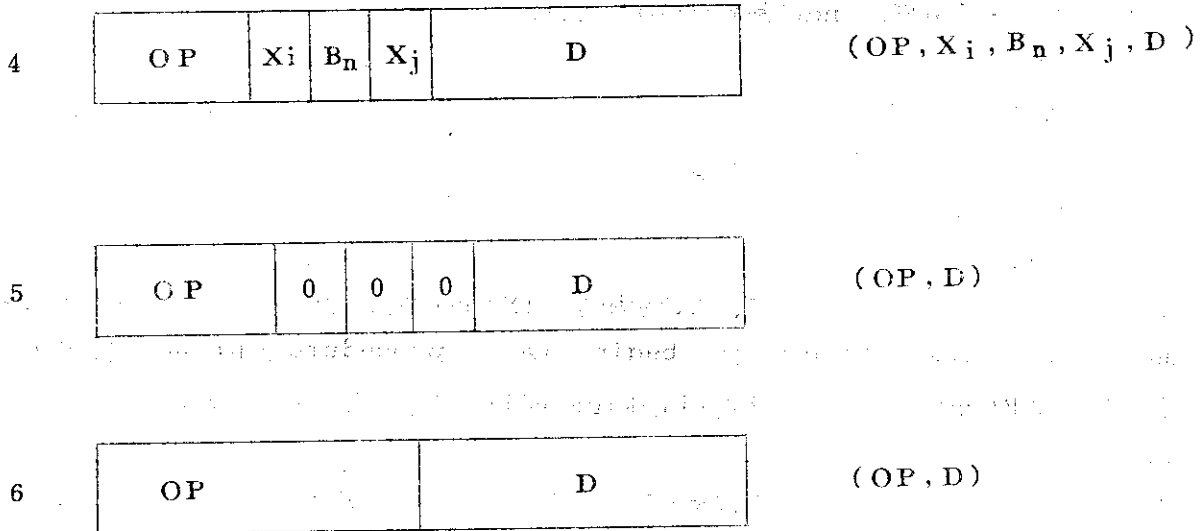


Fig. 5 function の形式 (FACOM230-60)

例

```
function LR(1, 01040̄), TRP(1, 60000̄), J(1, 40000̄),
        ADCON(4, 7770̄), BP(5, 0000̄) ¥
```

この宣言はつぎのように関数文で使われる。

```
begin label ADR1, ADR2, ADR3 ¥
        LR(ADR1) ¥
        TRP(S.OPEN) ¥
        J(ADR3) ¥
ADR1.. ADCON(0, 1, 0, ADR2) ¥¥
ADR2.. ADCON(3, 1, 0, FCB(1)) ¥
        BP(0) ¥
ADR3.. Comment NEXT STATEMENT ¥
```

これは FACOM230-60 システム・マクロ「オープン・ファイル」の展開形である。

注意

- (1) 8進数で3ケタの命令777は番地定数 (address constant) を示す。この777はコンパイラによつて8進数000に置きかえられ、そのかわりに結合プログラム (linkage editor) のためのコントロール・ビットが作られる。
- (2) 8進数で3ケタの命令776はセグメント・ロード定数 (segment load constant) を示す。
- (3) 形式(2)~(4)の関数の変数のX_i, B_nはそれぞれのレジスタ名を指定してもよいし、またそれぞれのレジスタに対応する番号を指定してもよい。
- (4) 形式(6)は(1)~(5)のあらゆる場合を含むことができる。

禁止事項

- (1) B_n はユーザがその使用法を理解している場合を除いてはB₁ 以外を指定してはならない。

21. 領域宣言 (Segment Base Declarations)

領域宣言によつて、この宣言がおこなわれたあとで定義される変数やプログラムの命令が宣言で指定された領域に含まれることになる。領域宣言は異つたプログラム(コンパイル)単位の間で領域を共有する必要があるときに特に有用である。

形式

segment base	B_i	(t1)
segment base	/領域名/	(t2)
segment base	//	(t3)
segment base	local	(t4)

(t1)の宣言がおこなわれると、これ以後に定義される領域(変数、プログラムの命令など)はすべてベース・レジスタ B_i を基礎番地にもつとして翻訳される。この宣言がなければ通常はベース・レジスタ B_1 が仮定されて翻訳される。

(t2)の宣言がおこなわれると、これ以後に定義される変数はこの宣言で指定された領域内で定義される。変数の領域内の番地は、変数の定義された順序にしたがう。この領域と FORTRAN の COMMON /領域名/、…で定義された領域(レイベル付コモン)とは同じであるから、GPLで書かれたプログラムと FORTRAN で書かれたプログラムとは領域を共有することができる。

(t3)の宣言は(t2)の宣言と同じであるが名前だけが違い、これは FORTRAN の COMMON……で定義された領域(ブランク・コモン)と同じである。

(t4)の宣言は(t1)から(t3)までの宣言を取消す働きをもっている。この宣言がなされたあとは、翻訳される命令と変数はすべてこのプログラム単位の領域内にとられる。

例

```
segment base /COM/ ¥ real A1, B1, C1 ¥
segment base /COM/ ¥
integer I, J, K ¥ segment base // ¥
real A, B, C ¥ array 10 real D ¥
segment base local ¥
real X, Y, Z ¥
```

上の例では、領域名 COM (FORTRAN のレイベルつきコモン /COM/ と同じ) に 6 個の変数 A1, B1, C1, I, J, K の番地がとられる。領域名 // (FORTRAN のブランク・コモンと同じ) で 13 個の変数の番地がとられる。segment base local のあとのこのプログラムに依存した局所的な変数 X, Y, Z の番地は、このプログラムの変数の領域にとられるが、これらの局所変数の領域名は存在しないから、局所変数を他のプログラム単位から呼び出すことはできない。

注意

(1) どのプログラム単位でも、翻訳の初めには

```
segment base B1
segment base local
```

が仮定されているから、この2つを宣言しなくてよい。

(2) `segment base` / 領域名 / (// を含む) で変数を定義したあとで局所変数を定義したり、実行文を定義するとき、そのまえに必ず `segment base local` の宣言がある。

(3) 1度定義された (t1) の宣言文をリセットするのは、新しい (t1) 形式の宣言による。(t2), (t3) の宣言をリセットするのは、新しい (t2), (t3) の形式の宣言か (t4) の宣言による。

(4) 同一ブロック内で同じ名まえをもつ領域宣言があるときは、それらの宣言はひとつのつらがりで見なされ、全体の大きさで領域の大きさが決まる。

(5) ひとつのブロック内で定義された領域は、そのブロックが終了したときに、そのブロック内で定義されたその領域の変数に相当する番地が消去される。ただし領域名は消去されない。

(6) 領域の大きさは、プログラム単位の翻訳時にその領域が取る最大の大きさとして定義される。

22. ブロック

ブロックはおもにつぎの2つの目的のために使われる：

- (1) 一連の文をまとめて1つの無条件文とする。
- (2) 新しい量を導入し、これに名まえを与える。この名まえは外側のブロックでは未定義である。

形式

<code>begin D ¥ ... ¥ D ¥ S ¥ ... S ¥ end</code>	(t1)
<code>begin S ¥ ... S ¥ end</code>	(t2)

ここでDは宣言、Sは文を示す。ブロックも1つの文であるから、Sはブロックであつてもよい。

ブロック内では宣言Dは文Sのまえになければならない。ブロック内の文Sは左から右へと実行される。

(t1) の形式では宣言Dによつて新しい量が導入される。この量に与えられた名まえは、このブロックの外側のブロックから呼び出すことはできない。また外側のブロックと同じ名まえが定義されると、このブロック内では新しく定義された名まえが意味をもち、その名まえのもつ量が使われる。このブロックの外側では、それまで外側で定義された名まえと量が意味をも

注意

(1) どのプログラム単位でも、翻訳の初めには

```
segment base B1
segment base local
```

が仮定されているから、この2つを宣言しなくてよい。

(2) `segment base` /領域名/(//を含む)で変数を定義したあとで局所変数を定義したり、実行文を定義するとき、そのまえに必ず `segment base local` の宣言がいる。

(3) 1度定義された(t1)の宣言文をリセットするのは、新しい(t1)形式の宣言による。(t2),(t3)の宣言をリセットするのは、新しい(t2),(t3)の形式の宣言か(t4)の宣言による。

(4) 同一ブロック内で同じ名まえをもつ領域宣言があるときは、それらの宣言はひとつのつながりで見なされ、全体の大きさで領域の大きさが決まる。

(5) ひとつのブロック内で定義された領域は、そのブロックが終了したときに、そのブロック内で定義されたその領域の変数に相当する番地が消去される。ただし領域名は消去されない。

(6) 領域の大きさは、プログラム単位の翻訳時にその領域が取る最大の大きさとして定義される。

22. ブロック

ブロックはおもに下記の2つの目的のために使われる:

- (1) 一連の文をまとめて1つの無条件文とする。
- (2) 新しい量を導入し、これに名まえを与える。この名まえは外側のブロックでは未定義である。

形式

<code>begin D ¥ ... ¥D ¥S¥ ... S¥ end</code>	(t1)
<code>begin S ¥ ... S¥ end</code>	(t2)

ここでDは宣言，Sは文を示す。ブロックも1つの文であるから，Sはブロックであつてもよい。

ブロック内では宣言Dは文Sのまえになければならない。ブロック内の文Sは左から右へと実行される。

(t1)の形式では宣言Dによつて新しい量が導入される。この量に与えられた名まえは、このブロックの外側のブロックから呼び出すことはできない。また外側のブロックと同じ名まえが定義されると、このブロック内では新しく定義された名まえが意味をもち、その名まえのもつ量が使われる。このブロックの外側では、それまで外側で定義された名まえと量が意味をも

つ。

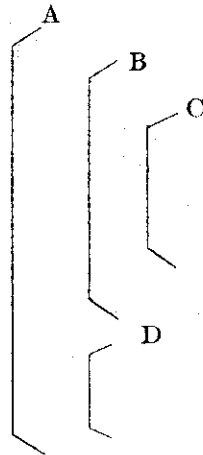
(t2)の形式では宣言がないから、このブロックで使用されるレイベル宣言、変数などはすべてこのブロックを含む外側のブロックで定義されていなければならない。

23. ブロック・レベルとブロックのネスト

23.1 ブロックのネストとブロックのレベル

いくつかのブロックがたがいに含む、含まれるの関係にあるとき、これらのブロックはネストをなすという。

つぎの図でブロックA、またはB、またはCを基準にすると、ブロックA、B、Cはネストをなしており、ブロックA、またはDを基準にするとブロックA、Dはネストをなしている。



ブロックBとDはネストを成さない。このBとDはAについて同列（並列）なブロックであるという。ブロックBが他のブロックAに含まれているとき、BはAよりも高い（より深い）ブロック・レベルをもつという。

23.2 宣言ブロック

ブロックはつねにbegin ではじまり、end で終る。ブロックにはbegin のあとに宣言が続くものと、実行文が続くものがある。前者を宣言ブロック、後者を無宣言ブロックとよぶ。宣言ブロックは翻訳時に宣言を処理するための初期設定が必要となるので、ややコンパイル時間を消費する。無宣言ブロックについてはこのようなことはない。

23.3 ブロックとレイベル

ブロック内で定義されたレイベルは宣言とは見なされない。レイベルは、レイベル名にピリオドを2つ続けることによつて定義される。レイベルの定義とレイベル宣言とは別の概念であるから、この2つを混同してはならない。無宣言ブロック内でレイベルの定義が存在しても、そのブロックは宣言ブロックとはならない。

宣言ブロック内で定義されたレイベルを、このブロックの外側から参照することはできない。

つ。

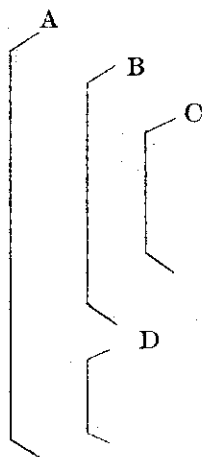
(t2) の形式では宣言がないから、このブロックで使用されるレイベル宣言、変数などはすべてこのブロックを含む外側のブロックで定義されていなければならない。

23. ブロック・レベルとブロックのネスト

23.1 ブロックのネストとブロックのレベル

いくつかのブロックがたがいに含む、含まれるの関係にあるとき、これらのブロックはネストをなすという。

つぎの図でブロック A、または B、または C を基準にすると、ブロック A、B、C はネストをなしており、ブロック A、または D を基準にするとブロック A、D はネストをなしている。



ブロック B と D はネストを成さない。この B と D は A について同列（並列）なブロックであるという。ブロック B が他のブロック A に含まれているとき、B は A よりも高い（より深い）ブロック・レベルをもつという。

23.2 宣言ブロック

ブロックはつねに **begin** ではじまり、**end** で終る。ブロックには **begin** のあとに宣言が続くものと、実行文が続くものがある。前者を宣言ブロック、後者を無宣言ブロックとよぶ。宣言ブロックは翻訳時に宣言を処理するための初期設定が必要となるので、ややコンパイル時間を消費する。無宣言ブロックについてはこのようなことはない。

23.3 ブロックとレイベル

ブロック内で定義されたレイベルは宣言とは見なされない。レイベルは、レイベル名にピリオドを2つ続けることによつて定義される。レイベルの定義とレイベル宣言とは別の概念であるから、この2つを混同してはならない。無宣言ブロック内でレイベルの定義が存在しても、そのブロックは宣言ブロックとはならない。

宣言ブロック内で定義されたレイベルを、このブロックの外側から参照することはできない。

これに反して無宣言ブロック内で定義されたレイベルはこのブロックの外側で参照することができる。

例1.

```
begin label L ¥
      L.. X3=X3+1 ¥
end
```

} 宣言ブロック

例2.

```
begin integer I ¥
      L.. X3=X3+1 ¥
end
```

} 宣言ブロック

例3.

```
begin
      L.. X3=X3+1 ¥
end
```

} 無宣言ブロック

例1, 2のレイベルLは, このブロックの外側から参照することはできない。これに反して例3のレイベルは, このブロックの外側から参照することができる。

2.3.4 ブロック・オプション

ブロックAで宣言された変数は, このブロックの外側では参照できないから, その変数に割当てられた番地は, ブロックAに一時的に割当てられたものと解することができる。したがって, ブロックAと並列なブロックBで宣言された変数は, ブロックAで宣言された変数と同じ番地を割当てられてもよいことになる。これはALGOLの考え方である。GPLではブロック・オプションBLK0と制御カードに指定されているときに, このような番地の割当てがおこなわれる。これに反し, 一度割当てられた番地は, 再び他の変数に割当てられることはないように翻訳することもできる。これはFORTRANの考え方である。GPLではブロック・オプションBLK1制御カードに指定されているときに, このような番地の割当てがおこなわれる。GPLとBLK0の指定がなければ, BLK1が仮定される。

謝 辞

GPLコンパイラを作成するにあたって原研計算センタの岡田, 山崎, 次田の諸氏には, GPLで書かれた解釈ルーチンをFORTRAN語に書き換えていただいた。富士通株式会社SEの安村, 大浦, 井坂の諸氏には必要な資料を取り寄せていただき, またプログラムのデバッグでもお世話になつた。上記の方々および, GPLについて検討, 支援していただいた原研計算センタの諸氏に感謝の意を表したい。

これに反して無宣言ブロック内で定義されたレイベルはこのブロックの外側で参照することができる。

例1.

```
begin label L ¥
    L.. X3=X3+1 ¥
end
```

} 宣言ブロック

例2.

```
begin integer I ¥
    L.. X3=X3+1 ¥
end
```

} 宣言ブロック

例3.

```
begin
    L.. X3=X3+1 ¥
end
```

} 無宣言ブロック

例1, 2のレイベルLは, このブロックの外側から参照することはできない。これに反して例3のレイベルは, このブロックの外側から参照することができる。

23.4 ブロック・オプション

ブロックAで宣言された変数は, このブロックの外側では参照できないから, その変数に割当てられた番地は, ブロックAに一時的に割当てられたものと解することができる。したがって, ブロックAと並列なブロックBで宣言された変数は, ブロックAで宣言された変数と同じ番地を割当てられてもよいことになる。これはALGOLの考え方である。GPLではブロック・オプションBLK0と制御カードに指定されているときに, このような番地の割当てがおこなわれる。これに反し, 一度割当てられた番地は, 再び他の変数に割当てられることはないように翻訳することもできる。これはFORTRANの考え方である。GPLではブロック・オプションBLK1制御カードに指定されているときに, このような番地の割当てがおこなわれる。GPLとBLK0の指定がなければ, BLK1が仮定される。

謝 辞

GPLコンパイラを作成するにあたって原研計算センタの岡田, 山崎, 次田の諸氏には, GPLで書かれた解釈ルーチンをFORTRAN語に書き換えていただいた。富士通株式会社SEの安村, 大浦, 井坂の諸氏には必要な資料を取り寄せていただき, またプログラムのデバッグでもお世話になつた。上記の方々および, GPLについて検討, 支援していただいた原研計算センタの諸氏に感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) Wirth, N. PL360, A Programming Language for the 360 Computers, J. ACM, Vol. 15, No. 1, Jan. 1968, pp. 37-74.
- 2) 浅井, 稲見, 藤村, 変形 PL 360 言語の文法とコンパイラ, 第 12 回プログラミングシンポジウム報告集, 情報処理学会, 1971年1月.
- 3) 藤村, 浅井. PRECEDENCE: Precedence Grammars を求めるプログラム, JAERI-memo. 4003, 日本原子力研究所, 1970年5月.

付 録

ここではGPLの構成についてすこしふれておく。Fig. 6 はPL 360 とGPLとの比較表である。GPLはPL360から出発したが、その機能や内容はほとんど異つてゐる。Fig. 7 はGPLの解析の基礎をなす順位文法と順位関数を計算するプログラム3)の機能を示したものである。Fig. 8 はこうして得られた関数値を実際のコンパイラが使用する方法を、Fig. 9とFig. 10はGPLで書かれたGPLコンパイラの1部を示している。Fig. 11とFig. 12はGPLの文法と順位関数である。

項 目	PL 360	GPL
目 標	システム記述言語	同 左
計 算 機	IBM System 360	FACOM 230-60, IBM 360, CDC 6600
言 語 形 式	ALGOL 60-like 言語	同 左
文 法	順位文法	同 左
解 析	順位関数	同 左
翻 訳	文法生成規則に対して解釈規則を与えておこなう。	同 左
命 令 生 成	IBM System 360	仮想的な計算機PM 1の命令を生成し、その後その命令を対象計算機の命令に変換。
プログラムのロード	簡単なセルフ・ローダを使用	OSのLinkage Editorを使用。
他言語との結合	できない	アセンブラ言語, FORTRAN 語で書かれたプログラムとの結合可能。

Fig. 6 PL360とGPL

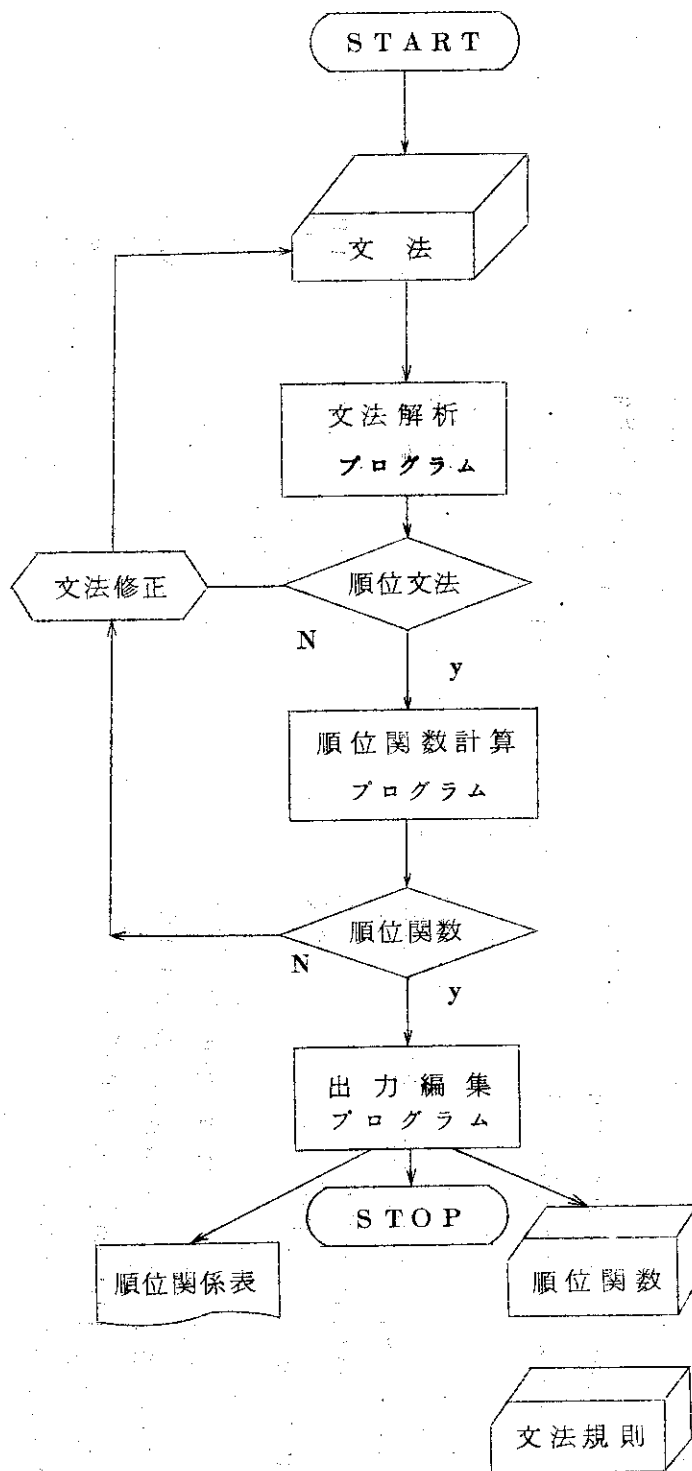
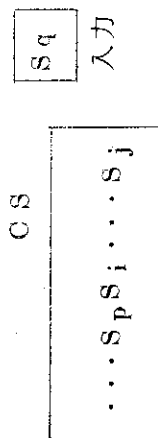


Fig. 7 順位関数の計算手順

生成規則の左辺の検索

生成規則 $S_k \rightarrow S_i \dots S_j$ の左辺 S_k の検索は次の1.~4.の手順でおこなう。

1. コントロール・スタックCSのなかに置かれている S_i, \dots, S_j などはすべて数値化されている。



2. 右図のCSの文法要素と入力要素 S_q との間に次の順位関係があるとき左辺の検索が始まる。

$$S_p < S_i, S_j > S_q$$

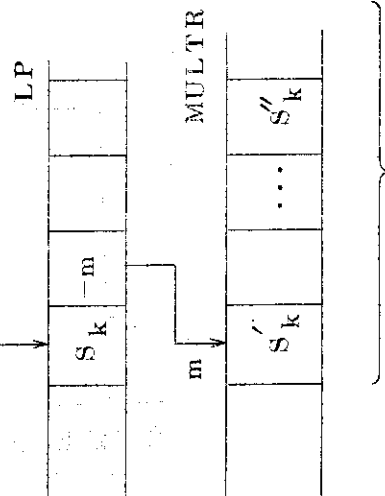
$$S_i \neq \dots \neq S_j$$

3. 数値 S_i, \dots, S_j の和を求め、その和 θ は左辺の表LPのひとつの番地を与える。

$$\theta = S_i + \dots + S_j$$

もし $LP(\theta) > 0$ ならば、LP(θ)が求める左辺である。

4. もしL($\theta < 0$)ならば、和 θ を持つ右辺は複数個存在する。このとき、これらの生成規則は表MULTRに保存されている。LP(θ)はMULTRの該当する生成規則の最初の番地を与える。



5. GPLの場合のLP, MULTRの大きさは、それぞれ2000バイトと450バイトである。

複数個の生成規則

Fig. 8 順位文法の解析

```

* 'COMP AOR' ... 'COMP COND' OR
*
*****
X0=X0+3 * PROG(X0)=TRA * PROG(X0+1)=00 * PROG(X0+2)=00
COMMENT TRANSFER IF TRUE(I.E., TRA). THIS CONDITION MEANS THAT THE
PRECEDING CONDITION IS TRUE. TPL MEANS TRANSFER IF
TRUE. 00 MUST BE FILLED WITH A LOCATION OF NEXT
'SIMPLE ST'. REMEMBER CURRENT X0 IN TFS STACK. POP UP
TFS STACK IF IT IS ALREADY DEFINED BY 'COMP COND' AND*
ITFS=ITFS+1 * X2=ITFS * TFS(X2)=X0 * X2=ITFS *
IF TFS(X2)=0 THEN GOTO AOR1 *
IP=X0 * X0=ITFS(X2) * PROG(X0+1)=IP+3 * X0=IP *
(ITFS=ITFS-1 *
AOR1.. ITFS=ITFS-1 *
GOTO PPARSE *
*****
S067..
COMMENT*****
* 'COND THEN' ... 'COMP COND' THEN
*
*****
X0=X0+3 * PROG(X0)=TRA * PROG(X0+1)=00 * PROG(X0+2)=00 *
ITFS=ITFS+1 * TFS(X2)=X0 *
COMMENT CLOSE TFS STACK OF THIS 'COMP COND' *
X2=ITFS * IP=X0 *
CTH1.. IF TFS(X2)=0 THEN GOTO CTH2 *
X0=TFS(X2) * PROG(X0+1)=IP+3 * X2=X2-1 * GOTO CTH1 *
CTH2.. X2=X2-1 * ITFS=X2 * X0=IP *
GOTO PPARSE *
*****
S068..
COMMENT*****
* 'TRUE PART' ... 'SIMPLE ST' ELSE
*
*****
COMMENT GENERATE A TRANSFER INSTRUCTION TO SKIP A STATEMENT
FOLLOWING ELSE *
X0=X0+3 * PROG(X0)=TRA * PROG(X0+1)=00 * PROG(X0+2)=00 * IP=X0 *
COMMENT CLOSE TFS STACK OF THIS 'COMP COND' *
X2=ITFS *
TPR1.. IF TFS(X2)=0 THEN GOTO TPR2 *
X0=TFS(X2) * PROG(X0+1)=IP+3 * X2=X2-1 * GOTO TPR1 *
TPR2.. X2=X2-1 * ITFS=X2 *

```

fig. 10 GPLコンパイラの1部

```

GLOBAL PUSH DOWN STACKS
-----
* CS ... CONTROL STACK (GLOBAL)
THIS STACK STORES SYNTACTIC ELEMENTS IN ANALYSIS. IF DECLARA-
TION IS PARSED, THIS STACK CONTAINS SYNTACTIC ELEMENT 'DECL'
AS ITS TOP ELEMENT. IF A PROGRAM HAS BEEN PARSED BY THE
PARSER, THE STACK CONTAINS 'PROGRAM' AS ITS TOP ELEMENT.
ICS ... INDEX TO CS
* VS ... VALUE STACK (GLOBAL)
THIS STACK CONTAINS VALUES WHICH CORRESPOND TO SYNTACTIC EL-
MENTS IN CONTROL STACK CS. IN MOST CASES THE VALUE IS AN
ADDRESS OF AN IDENTIFIER OR AN OPERATOR.
IVS ... INDEX TO VS
* BS ... BLOCK STACK (GLOBAL)
THIS STACK CONTAINS TYPE OF BLOCKS(E.G. PROCEDURE, SYN DECL,
PROGRAM, ETC) IN ANALYSIS. THE TOP OF THE STACK CONTAINS THE
TYPE OF BLOCK BEING ANALYZED.
IBS ... INDEX TO BS
* BNS ... BLOCK NUMBER STACK (GLOBAL)
THIS STACK CONTAINS BLOCK NUMBERS OF BLOCKS IN ANALYSIS.
EVERY BLOCK WHICH IS PROCESSED BY THE PARSER HAS A SEQUENTIAL
NUMBER IN ORDER OF OCCURRENCES.
IBNS ... INDEX TO BNS
* PAS ... TARGET PROGRAM ADDRESS (GLOBAL)
THIS STACK CONTAINS GENERATED TARGET CODE ADDRESSES OF
SYNTACTIC ELEMENTS IN CS.
IPAS ... INDEX TO PAS
* LDS ... LABEL DEFINITION STACK (GLOBAL)
THIS STACK CONTAINS LABELS AND THEIR LOCATIONS DEFINED BY
'LABEL DEF'... EACH CELL OF THE STACK IS OF THE FORM
'BOTTOM OF STACK
... (0,0) (PTR,DL) ... (PTR,DL) (0,BLOCKNO) (PTR,DL) ...
WHERE PTR IS A POINTER, FOR OF LABEL IDENTIFIER AND
DL IS A DEFINED LOCATION OF THE LABEL.
ILDS ... INDEX TO LDS
* HLS ... REFERENCED LABEL STACK (GLOBAL)
THIS STACK CONTAINS REFERENCED LABELS, LOCATIONS REFERENCED.
EACH CELL OF THE STACK IS OF THE FORM
BOTTOM (0,0) (PTR,RL) ... (PTR,RL) (0,BLOCKNO) (PTR,RL) ...
WHERE PTR IS A POINTER OF REFERENCED LABEL IDENTIFIER,
RL IS A LOCATION WHERE THE LABEL IS REFERENCED AND
BLOCKNO IS THE BLOCK NO. IN WHICH THE LABEL IS
REFERENCED.
AT AN END OF A BLOCK, LDS STACK IS SEARCHED TO FILL A PROPER

```

fig. 9 GPLコンパイラのスタック

85	'MULT ASS'	...	'MULT ASSA', 'T CELL EXPR'	138	REAL
86	'VECTOR EXPR'	...	'MULT ASSA'	139	LONG REAL
87	'CASE SEQ'	...	'CASE SEQ', 'X REG', 'OF BEGIN'	140	RYTF
88		...	'CASE SEQ', 'STATEMENT'	141	CHARACTER
89		...	'T CELL', 'X REG EXPR'	142	LARFL
90	'SIMPLE ST'	...	'T CELL', 'EQU', 'R REG'	143	
91		...	'R REG', 'T CELL'	144	'SI T TYPE'
92		...	'T CELL ASS'	145	'ARMAY', 'T NUMBER', 'SI T TYPE'
93		...	'X REG ASS'	146	'T TYPE', 'ID'
94		...	'MULT ASS', 'VECTOR EXPR'	147	'T DECL2', 'ID'
95		...		148	'T DECL1', 'LP'
96		...		149	'T DECL3'
97		...		150	'T DECL4'
98		...		151	'T DECL5'
99		...		152	'T DECL4', 'T NUMBER'
100		...		153	'T DECL4', 'STRING'
101		...		154	'T DECL1', 'T NUMBER'
102		...		155	'T DECL1', 'STRING'
103		...		156	'T DECL1', 'T NUMBER'
104		...		157	'T DECL1', 'STRING'
105		...		158	'T DECL5'
106		...		159	'FUNCTION'
107		...		160	'FUNC DC7', 'ID'
108		...		161	'FUNC DC1', 'ID'
109		...		162	'FUNC DC2', 'T NUMBER'
110		...		163	'FUNC DC3', 'T NUMBER'
111		...		164	'FUNC DC4', 'T NUMBER'
112		...		165	'FUNC DC5', 'T NUMBER'
113		...		166	'FUNC DC6', 'ID', 'SYN'
114		...		167	'SI T TYPE', 'REGISTER', 'ID', 'SYN'
115		...		168	'SI T TYPE', 'ADCON', 'ID', 'SYN'
116		...		169	'SI T TYPE', 'SLCON', 'ID', 'SYN'
117		...		170	'SYN DC3', 'ID', 'SYN'
118		...		171	'SYN DC1', 'T CELL'
119		...		172	'SYN DC1', 'T NUMBER'
120		...		173	'SYN DC1', 'X REG'
121		...		174	'SYN DC2'
122		...		175	'SEGMENT'
123		...		176	'PROCEDURE'
124		...		177	'SEG HEAD', 'PROCEDURE'
125		...		178	'PROC HD1', 'ID'
126		...		179	'PROC HD2', 'ID'
127		...		180	'PROC HD4'
128		...		181	'PROC HD3', 'DPARAM ID'
129		...		182	'PROC HD4', 'ID'
130		...		183	'PROC HD5', 'ID'
131		...		184	'PROC HD6', 'ID'
132		...		185	'PROC HD2D', 'ID'
133		...		186	'PROC HD2', 'ID'
134		...		187	'T DECL7'
135		...		188	'FUNC DC7'
136		...		189	'SYN DC2'
137		...		190	'PROC HD6', 'STATEMENT'
138		...			'SEG HEAD', 'BASE', 'B REG'
139		...			
140		...			
141		...			
142		...			
143		...			
144		...			
145		...			
146		...			
147		...			
148		...			
149		...			
150		...			
151		...			
152		...			
153		...			
154		...			
155		...			
156		...			
157		...			
158		...			
159		...			
160		...			
161		...			
162		...			
163		...			
164		...			
165		...			
166		...			
167		...			
168		...			
169		...			
170		...			
171		...			
172		...			
173		...			
174		...			
175		...			
176		...			
177		...			
178		...			
179		...			
180		...			
181		...			
182		...			
183		...			
184		...			
185		...			
186		...			
187		...			
188		...			
189		...			
190		...			

fig. 11 (4)

fig. 11 (3)

*** PRINT OF PRECEDENCE FUNCTIONS ***

J	F(I)	G(I)	ID
1	13	9	T NUMBER
2	6	6	STRING
3	9	5	X REG
4	12	3	FUNC ID
5	5	1	DPARAM ID
6	5	5	PROC ID
7	12	3	B REG
8	11	5	LABEL ID
9	2	2	EXTERN ID
10	12	6	T CELL IV
11	9	5	T CELL
12	4	6	T CELL1
13	4	6	T CELL2
14	4	6	T CELL3
15	5	6	ARITH OP
16	5	4	REFL OP
17	5	9	LOG OP
18	5	4	SHIFT OP
19	5	5	UNARY OP
20	3	5	EQV
21	3	9	X REG EXP1
22	4	4	X REG EXPR
23	4	4	X REG ASS
24	3	3	T CELL EXP1
25	6	6	T CELL EXP2
26	6	4	T CELL EXPR
27	4	4	T CELL EXP*
28	4	4	T CELL ASS
29	3	3	FUNCI
30	4	4	FUNCF
31	5	5	PROCF
32	4	4	PROCP
33	5	5	MULT ASS1
34	5	5	MULT ASS2
35	5	5	MULT ASS3
36	4	4	MULT ASS4
37	10	10	MULT ASS5
38	3	3	MULT ASS6
39	3	3	VECTOR EXPR
40	1	1	CASE SF@
41	2	2	SAMPLE ST
42	5	5	NOT
43	6	6	CONDITION
44	5	5	COMP COND
45	2	2	COMP AOR
46	2	2	COND THEN
47	2	2	COND PART
48	1	1	WHILE
49	2	2	COND DO
50	1	1	ASS STEP

```

191 'SFG HEAD' BASE 'EXTERN ID'
192 'SFG HEAD' BASE LOCAL
193 'ID' ..
194 'REGIN' ..
195 'BLOCKHEAD' 'DECL' *
196 'BLOCKHEAD' 'STATEMENT' *
197 'BLOCKBODY' 'LABFL DEF'
198 'BLOCKBODY' 'STATEMENT' *
199 'PROGRAM' .. 'STATEMENT' *
    
```

199 RULES

fig. 11 (5)

fig. 12 順位関数 (1)

51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104			
LIMIT	DO	STATEMENT*	STATEMENT	SI T TYPE	T TYPE	T DECL1	T DECL2	T DECL3	T DECL4	T DECL5	T DECL7	LP	FUNC DC1	FUNC DC2	FUNC DC3	FUNC DC4	FUNC DC5	FUNC DC6	FUNC DC7	SYN DC1	SYN DC2	SYN DC3	SFG HFAD	PROC HD1	PROC HD2	PROC HD3	PROC HD4	PROC HD5	PROC HD6	PROC HD20	DFCL	LABEL DEF	BLOCKHEAD	BLOCKBODY	PROGRAM	IDJ	IDT	INS	IDX	IDF	IDD	IDP	IDR	IDL	EXTERNAL-BASE-ID)	(+	-	*	/	++	--			
1	2	2	1	8	6	11	6	7	5	4	4	7	6	12	5	4	5	4	4	5	4	6	9	6	12	1	4	1	2	1	1	8	8	1	14	11	6	6	12	13	5	13	12	5	2	2	12	8	8	8	8	8	8	8	8	8
105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158			
.LT.	.EQ.	.GT.	.LE.	.GE.	.NE.	AND	OR	XOR	SHLA	SHRA	SHLL	SHRL	ARS	NFG	NEGARS	=	A	.	(())	CASE	OF	BEGIN	▶	NULL	GOTO	END	.NOT.	OVERFLOW	THEN	ELSE	WHILE	DO	STEP	UNTIL	IF	FOR	SHORT	INTEGFP	LOGICAL	REAL	LONG	BYTE	CHARACTER	LABEL	ARRAY	FUNCTION	SYN	REGISTER	ADCON	SLCON	SEGMENT	PROCEDURE			
8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7	8	8	8	5	5	5	5	5	5	3	11	11	3	6	3	8	6	8	8	8	8	5	1	1	10	9	9	9	10	9	9	9	9	9	5	8	6	6	6	10	8			

fig. 12 (3)

fig. 12 (2)

159			9
160			3
161			13
162			1
	BASE		
3	LOCAL		
2			
R			
1			

fig. 12 (4)